

「落語のラジオドラマ化」

——その実践と方法——

松本尚久*

はじめに

二〇一二年十二月から二〇一三年年一月にかけて、文化放送の委嘱によりラジオドラマ台本を四本執筆した。番組は『青山二丁目劇場』。毎週月曜日（二〇時三〇分～二一時）に放送されているラジオドラマ番組である。

委嘱内容は「新年にあたり、一月に放送される四回分を落語種のドラマで統一したい。ひいては落語演目の選定から脚色までを依頼する」というものであった。

打ち合わせで示された制作条件は以下の通りである。

① 原作演目の選定は松本尚久が担当し、それを制作統括者に提示する。制作統括者の判断のうえ、問題が無ければ台本執筆作業に入る。

- ② 原作を自由にアレンジ、改訂してよい。
- ③ 三十分番組なので、ドラマの実尺は最大二五分程度。
- ④ 出演者は、最大六名～七名程度。これはリスナーが混乱せずに聴取できることを考慮してのことである。

おおまかに右のような内容が確認され、私は台本執筆を引き受けた。

本稿では、ラジオドラマ収録に使用された台本を掲載し、それに併せて、作者である私の創作ノートを記したい。一人の演者による〈語り芸〉である「落語」と広義の〈近代劇〉である「ラジオドラマ」には、どのような相違と特徴があるのかを、実践をベースにして考えるのが本稿の趣旨である。また、原作の脚色・アレンジにはどのような方法があるのかを、さまざまな制約のなかで作成される「放送台本」を通じて具体的に考えてみたい。

以下、放送日順に台本を掲載し、創作ノートを付記する。

ラジオドラマ「たのきゅう」

二〇一三年一月七日放送

(登場人物)

- ・田能村の久兵衛Ⅱ通称「たのきゅう」(25歳)
- ・うわばみ(500歳)
- ・村芝居の親方 長十郎(45歳)
- ・村の娘A(18歳)
- ・村の娘B(18歳)
- ・茶屋のばば(不明・老婆とも、もののけともとれる存在)

※SEⅡ効果音

○シーン1・村芝居の劇中

SE 村芝居の開幕中。拍手・歓声などのざわめき。

たのきゅう「……いまこそ何を隠しましょう。源義経さまの家臣、佐藤忠信とは、真っ赤ないつわり。わたくしのまことの姿は、この吉野山をすみかといたす、狐にてございます」

長十郎 「はて面妖な」

たのきゅう「私の母親は、ここにある、初音の鼓と姿を変え、只今は静御前様のご寵愛。そのため、人のかたちになりすまし、昼となく夜となく、陰に、日なたに、御前さまと旅を供にし、敵方から御身をお守りしたのでございます」

長十郎 「その話が本当ならば、そなたの正体はまさしく狐」
たのきゅう「はっ。いまこそ見せんその姿！……」

SE ドロドロドロ……。

たのきゅう「人にあらざる狐の本性、しかとご覧くださりませ！」

SE ドロドロ……鋭い笛の音(狐に早変わり)

SE 観客の拍手喝采……。

○シーン2・村芝居の楽屋口 出待ち

村娘A 「まじでやばかった！ たのきゅうさんの芝居！」

村娘B 「あの！ 人間から狐に変わるところ。

ちょっと目を離れたすきに、衣装からなにから、すっかり変わっちゃって、凄すぎるんですけど！」

「うちの父ちゃんが言ってたけど、ああいうすごい役者はお江戸にもいないんだって！」

村娘B 「へえ。そんなにすごい人がなんで、こんな田舎の村芝居に出てくれるわけ？」

村娘A 「なんかね。これは庄屋さんから聞いたんだけど、たのきゅうさんは本職の役者じゃなくて、普段はうちの村から山みつつ超えて、川みつつ渡ったところにある、田能村ってところでお百姓さんしてるんだって」

村娘B 「……ふーん。田能村……まじで聞いたこと無い」

村娘A 「だけど、道楽でやっている役者があんまり上手いもんで、旅芝居の座長さんに頼まれて、冬の間だけ、役者として一座に入ってほうぼうの芝居に出てるってわけ。

だから、名前も本当は久兵衛っていうんだけど「田能村の久兵衛」さん、略して「たのきゅう」って呼ばれてるんだって」

村娘B 「……ってことは、実家は土地持ちで、美男で芝居が巧いっ

てわけね……」

村娘 A 「おまえ、目の色かえてんじゃないよ。先にたのきゅうさんに目を付けたのは、言っておくけど、わ・た・しのほうだからね！」

村娘 B 「あんたは、村の酒屋のせがれとくつつくって言ってただろう。あ、なんだい、その風呂敷包みは。あ、わかった。またぼた餅で気を引こうってんだね。ワンパターン！」

村娘 A 「あんたこそ、なんだい、その袂に入っている包みは。

ふーん。また付け文でもしようってんだろ！」

二人 「なに〜!! (にらみ合う)」

村娘 A 「あ、やばいやばい。たのきゅうさんが楽屋から出てくるよ！」

※ 二人、急に態度を変えて。

村娘 A 「たのきゅうさん、お疲れさまでした〜」

村娘 B 「今日の狐忠信、素晴らしかったです！」

たのきゅう 「ご覧頂きまして、ありがとうございます」

村娘 B 「たのきゅうさん、お手紙書きました。受け取って下さい！」

村娘 A 「あの、これ私がつくったぼた餅、よかったら食べて下さい。もしよかったら、いま、ここで食べますか？」

たのきゅう 「これは心づくしの品々、有り難く頂戴します。

ぼた餅も、食べたいのは山々なのですが、じつは先に宿屋に入った長十郎の親方から、急な呼び出しがありました。

いまは、あまり時間がありません。

あとで、必ず中を開けさせていただきます。

これにて、失礼いたします！」

SE タッタッタ…… (走っていく)

二人 「たのきゅうさん！ きつとよ〜！」

○シーン3・村の宿屋

SE ゴーン (村の鐘の音)

SE ふすまを開ける音。

たのきゅう 「たのきゅうでございます。今日もお疲れさまでした」

長十郎 「おお、たのきゅう。ご苦労さん、今日の狐忠信は、また一段と技が冴えていたな。お前の芝居は、ただ技が効くってだけじゃねえ。早変わりをしたあと、狐なら狐、侍なら侍、女房なら女房の心根になっている。そこがほかの役者にねえ味だ」

たのきゅう 「恐れ入ります。……ところで何か急な御用事でしょうか？」

長十郎 「うん。ついでしたが、田能村からの使いだと言って、お前あての手紙が来たんだな。なにか急用かもしれねえと思っ

て呼びにやっただ。さあ、ここに」

たのきゅう 「村から手紙……はじめてのことです。

ちょっとなかを改めさせていただきます」

SE 手紙の封を切る

たのきゅう 「なにに……田能村久兵衛の母親、みね、急病につき、すぐに帰られたし。取り急ぎ申し上げ候……」

長十郎 「どうしたい？」

たのきゅう 「これはいけません。田舎の母親がなにか急な病にかかった

とか」

長十郎

「おみねさんが？ そりゃ心配だ。

うん、わかった。ここの庄屋さんからは、芝居があんまり評判なんで二、三日日延べをしてくれと言われていたんだが、そういうことなら思案のほかだ。この村は今日で打ち出しということにして、明日、朝一番で田能村へ廻ろう」

たのきゅう「いや、それでは村の皆様に気の毒というものです」

長十郎

「いやゝ。じつをいうと、（ひそひそ声）

この村の亭主持ち二人に手を出しちゃってな。さっきもどっちを取るんだって、とんだ修羅場になりかかったんだ。だから、ややこしくならないうちに引き上げて、この村は、また来年ということにしよう」

たのきゅう「そんなことがあったのですか。女の人というものは怖いものですね。

それなら親方、勝手を言いますが、私一人、いまから田能村に急ぎたいと思うのですが、お許し頂けませんか？」

長十郎

「いまから？ もうすぐ日が暮れるぜ」

たのきゅう「村にいるのは年老いた母一人。もし出来ましたなら、一刻も早く帰ってやりたいと思います。

わたくしは幸い、足腰には自信がありますので、すぐに芝居の荷物をまとめて、山越えをいたします」

長十郎

「……なるほど、それも道理だな。だが、男といえども、草深い田舎道の一人旅。ムリしちゃいけねえぞ。

そうだ。芝居の衣装に侍の紋付き袴があったろう。あれを着て、腰に小道具の刀を差しておけ。侍に化けるんだ。

なあに、お前なら大丈夫。これで少しは追い剥ぎ除けになる」

たのきゅう「なるほど。それでは一足先に、田能村でお待ちしています」

○シーン4・夜の田舎道。

SE 野犬が激しく鳴いている。

夜道を走るたのきゅう。

たのきゅう「しっ！ しっ！ あっちへいけ、いかぬか！」

SE 野犬、どんどんほえる。

たのきゅう「おれは猫は好きだけど、犬は大の苦手なんだ。

ああ、野道でぼた餅なんて出すんじゃないぞ。

この鳴き声からすると一匹じゃないぞ。

どうしよう、どうしよう。

ん？ 遠くにちらちらしているのは灯りか。

あそこまで何とか逃げれば……」

SE 鳴き声、どんどん大きくなる。

○シーン5・峠の茶屋

SE 囲炉裏の音。

茶屋のばば「おやおや、それはお困りじゃったのう」

たのきゅう「いや、おはずかしい。犬が苦手と言うと、皆に笑われます。しかし、ここに茶屋があって、本当に助かりました」

茶屋のばば「このあたりの犬は、かわいいもんで、そう悪さはせんがの。まあ、ゆっくりしていけばええ。茶でも酒でもあるでの」

たのきゅう「すこし道に迷ってしまい、お訊ねしたいのですが、私は田能村へと急ぐ身の上。ここから先は、どう行くのが近道でありましょうか」

茶屋のばば「田能村……ああ、山城峠のその先じゃな。

ここから先は一本道じゃが……夜道の山越えはやめといったほうがええ」

たのきゅう「そんなに険しい道なのですか」

茶屋のばば「いや、道はそうでもないんじやが、夜になると、この山にはうわばみが出るでな」

たのきゅう「うわばみ……というと、大蛇ですか……はは、それは絵本でみる昔話みたいですね」

茶屋のばば「笑いこっちゃねえ。わしゃ見たことはないが、何尺もあるたいそうなうわばみが出て、人間を丸呑みにするということじゃ。夜分にここを山越えした者はねえ」

たのきゅう「とは言うものの、少しも早く田能村に帰りたい事情もあり、どうしたものでしょう」

茶屋のばば「奥には布団もある。ここで一晩あかせばええ」

たのきゅう「（考え、ふと話題を変えて）

ときにあなたは、どうしてこのような寂しい場所で、茶屋をいとなんでおいでなのですか？」

茶屋のばば「……ははは。わしだって、生まれたときからこの歳だったわけじゃない。娘っこのときもあったさ。

あれは今から何十年も前のことじゃが、わしが十八のとき、このあたりには小さな村があったんじや。

その年、ここに宿をとった若いお侍があつての。

そう、年格好はちょうどお前さまくらいじゃ」

たのきゅう「は……はあ」

茶屋のばば「そのお侍は諸国行脚の武者修行中だといっておった。わしはそのお侍に、はは、手をつけられてな。

まあ、一晩のうちに、男と女の間柄になったと思いなされ」

たのきゅう「そ……そうですか」

茶屋のばば「わしとそのお方は、夫婦約束でしたんじや。

ところが三日目の夜が明けてみると、お侍の寝床はもぬけのから。夜が明ける前に、どこかに逃げてしまいおった」

たのきゅう「……気持ちは、ちょっとはわかります……」

茶屋のばば「わしゃこのあたりを方々まで探し回ったが、お侍の姿はもどこにも見えん。けど、街道筋にこうして茶屋を出しておれば、いつかまた、あのお侍に会えるかもしれん。

そう思って、村の者が一人減り、二人減りしたあとも、ここに一人で住み続け、この歳になったと言うわけじゃ」

たのきゅう「……懇切丁寧にありがとうございます」

茶屋のばば「よく見ると、お前さんの顔には、あのお侍の面影がある。

そうして紋服を着た姿も、刀を差した格好も。何より顔かたちがよく似ておる。

今夜はここに泊まっていくがいい。

そこに布団もある。

逃がさぬ。もう決して逃がさぬぞ……。

うふふふふ……（不気味に響く）」

○シーン6・夜の山道

たのきゅう SE 足早に歩くたのきゅう
……まことに、女の一念は怖いものだ。

おばあさんの申し出は有り難かったが、わたしは丁重に断って、茶屋をあとにした。ウワバミが出るなどと言っていたが……なに、田舎によくある言い伝えのたぐいだろう。それよりも早く母の顔がみたい。

SE 不気味な風

たのきゅう 「おかしい。一本道のはずなのに、さっきから同じところを歩いているようだ」

SE 落雷（とか何か、大音響）

SE 不気味な音響

うわばみ 「道を歩む男、おとなしくせよ」

たのきゅう 「……ん？ この白髪の老人はいいたいだれだ？」

うわばみ 「我が身を不審に思うこともっとも。

我はこの山に年久しく住まう、うわばみの化身なり。

人間どもは片端から我の餌食になること、この山の必定。

これまでの天命と思い、覚悟するがよい」

たのきゅう 「……ホントにでちゃった。なんまんだぶ、なんまんだぶ」

うわばみ 「はて肝の小さきやつ。我の餌食となる前に、その名を名乗り、語って聞かせよ」

たのきゅう 「はい……（小声で）、私は、田能村の久兵衛、たのきゅう

と言う者でございます」

うわばみ 「よく聞こえん。もそっと大きな声で申せ！」

たのきゅう 「はい、私は「たのきゅう」でございます」
うわばみ 「うーん？」

（ガラリと雰囲気変わり）

た・ぬ・き・い？ お前、狸なのか？」

たのきゅう 「……へっ？ ……は、はい！」

うわばみ 「なんだよ、狸なら狸とそういつてくれよ。

こうやって芝居がるの、くたびれるんだぜ。

久しぶりに人間が来たのかと思って、はりきって凄味をきかせたのになあ」

たのきゅう 「あの……スイマセン」

うわばみ 「べつに謝るこたあねえ。おれは狸は食べないから安心しな。

……それにしてもうまく化けたなあ。どっからどう見ても、

若待じゃねえか。ここが尻尾か？ ん？」

たのきゅう 「はい、あの、あんまり触らないでください」

うわばみ 「わるかった、わるかった。

まあ、ちょっとつきあえや」

○シーン7・うわばみの住むほこら

SE 酒を注ぐ

うわばみ 「ま、どぶろくだが遠慮無くやってくれ。

あとは、蛙の一夜干し、蟬せんべい、鳩の鉄砲豆、こんな

ところしかないが、不景気だ。勘弁してくれ」

たのきゅう 「た、たいへんなご馳走です」

うわばみ 「ところで。おれは、狸が人間に化けるところを、目の当た

りにしたのは今日がはじめてだ。

黙って通してやる代わりに……というわけじゃないが、何
か見せてくれないか？」

たのきゅう 「は、はい。」

芝居の衣装と小道具を使えば、何とかなるだろう……」

うわばみ 「なにか言ったか？」

たのきゅう 「あ、いえ。」

化けるには化けられるのですが、へへ、化けるところを見
られているとやりにくいものです。

私がひの、ふの、み、と合図をしますので、そこで目を明

けてくださいませんか」

うわばみ 「うん。そりゃそうかもしれないねえな。」

わかった、目をつむればいいんだな」

たのきゅう 「はい……ではちょっと待ってください」

SE ドラムロール……

たのきゅう 「……いきます、ひの、ふの、み！」

SE ドンドン！

SE みやびな音楽

たのきゅう 「(女声で) 花の色は移りにけりないたずらに、わが身世に
ふるながめせしまに。わが名は小野小町なり」

うわばみ 「こりゃすげえ、あつと言う間に、こりゃ女の姿だ。」

もったないか出来るか？」

たのきゅう 「はい……ではもう一度、目をつぶってください」

うわばみ 「うん、わかった」

SE ドラムロール……

たのきゅう 「……いきます、ひの、ふの、み！」

SE ドンドン！

SE ビヨーン、ビヨーンと跳ねている。

うわばみ 「キョンシード！ こりゃいま人気なんだろう？

いいぞ、いいぞ！ もっと頼む」

※ 以下、くり返し化けている表現

SE ドラムロール……ドンドン！

SE セクシーな音楽

うわばみ 「だんみつだ！ 瓦版で見たことある！」

SE ドラムロール……ドンドン！

SE いびき

うわばみ 「狸寝入り！ これがまことの狸寝入りだ！」

SE ドラムロール……ドンドン！

SE キュッキュッキュ……

うわばみ 「カップだ。カップが胡瓜を食べている！」

SE ドラムロール……ドンドン！

SE 笛の音

うわばみ 「狐だ！ 狸が狐に化けやがった！」

たのきゅう 「人にあらざる狐の本性、しかとご覧くださりませう！」

うわばみ 「こりゃ愉快、愉快！ こんなに楽しい見世物ははじめてだ

う！」(エコー)

SE 鳥の声(翌朝)

たのきゅう 「では、ここでおわかれ致します」

うわばみ 「昨日はすっかり働かせちゃって悪かったな。

おれはあんなに笑ったことはなかったぜ」

たのきゅう 「私も、一晩であんなに化けたことはありません。」

よい勉強になりました」

うわばみ 「これは、少ないけれど手みやげだ。」

蛙の一夜干し、蟬せんべい、鳩の鉄砲豆。遠慮することあ
ねえ」

たのきゅう 「……ありがとうございます」

うわばみ 「おれとお前は、仲間になった。いいな」

たのきゅう 「はい」

うわばみ 「おれたちの世界では、仲間になったら互いに証文を交わす

決まりごとがある」

たのきゅう 「証文？ ですか」

うわばみ 「ああ。証文といっても紙に書くわけじゃねえ。お互いに、

苦手なもの。嫌いなものを明かすんだ。まあ、自分の弱点を
相手に明かすというわけさ」

たのきゅう 「なるほど」

うわばみ 「おれから先に言おう。」

おれたち、うわばみの仲間は、みな「煙草のヤニ」と「柿
渋」が大の苦手なんだ。

この二つを混ぜ合わせて、体にかげられると、もう力が出
せねえ。人間を呑むことも出来なくなっちゃう。

まあ、あとは細く生きて行くしかねえんだ」

たのきゅう 「へえ……煙草のヤニに柿渋、ですか」

うわばみ 「つぎは、お前たちの怖いものを明かしてくれ」

たのきゅう 「そうですね……私も二つあります。ひとつは、金」

うわばみ 「カネ？ 寺にぶらさがっている、あれか？」

たのきゅう 「いえ、人間が使っている金子、お金です。」

人はお金に目がくらみ、争い、道を誤り、ときには人を殺
めたりもします。私は金というものが怖い」

うわばみ 「ふーん、そんなもんかね。もうひとつは」

たのきゅう 「女の人です」

うわばみ 「女……っていうと人間の女か？ 男の間違いじゃねえの
か？」

たのきゅう 「……いえ、女の人の考えていることは、私にはおそろしい
ように感じられます。この二つでしゅうか」

うわばみ 「そうかい。まあ、狸のことはよくわからねえな。

じゃあここで、右と左にわかれることにしよう。

もう道に迷うんじゃねえぞ」

SE 風の音

たのきゅう うわばみは、そういうとかき消すように消えてしまった。

○シーン8・村芝居の楽屋口（翌日）

村娘A 「やっぱり本当に帰っちゃったみたいだよ」

村娘B 「まじで？ 夜のうちに？」

村娘A 「信じられない。たのきゅうさんがうちに黙っていなくな
るとか、あり得ない」

村娘B 「帰るならかえるで、なんでそういわないかな」

村娘A 「言いたくなかったとか」

村娘B 「庄屋さんに聞いたたら、また来年の村芝居に来てくれるっ
て」

村娘A 「来年って一年後でしょ？ そしたら私、もう十九だよ？」

村娘B 「それから一年たったら二十歳だよ」

村娘 A 「まじ……」

村娘 B 「ねえ、田能村ってどこにあるのかな？」

村娘 A 「私もいまそう思った。なんか山の向こうでしょ」

村娘 B 「あれ？ もしかして追っかけようとしてる？」

村娘 A 「あんたがでしょ？」

村娘 B 「私が先に行くから」

二人 「私が！」「私が！」と言い合う……。

○シーン 9・田能村

たのきゅう 山の中から、田能村へどうやってたどりついたのかは、じ

つはよく覚えていない。

夢うつつのまま、さまよい歩いたらしく、村へ帰るまでに
ずいぶんと時間がかかったようだ。

家に帰った私の顔をみて一番よろこんだのは母だった。

母の病気というのはいしたことはなく、正月に雑煮を食べ
過ぎて、腹が苦しくなったのを、村の者が大げさに伝えただ
けのことだった。いずれにしても大事なくてよかった。

ひとつ、後悔していることがある。

村の者に「うわばみ」のことを訊かれ、というわばみの弱
点を喋ってしまったのだ。

村の若い衆は、煙草のヤニと柿渋を、大きな樽でかき混ぜ、
大勢でうわばみ退治に出かけていった。

SE ウワ〜ッ（うわばみの悲鳴）

それから、ひと月ほど経ったころ。

SE ドン、ドン

夜中に家の戸を叩く音がする。

誰だろうと思い、戸の隙間から見ると、月の光に照らされ
ているのは、あのときのうわばみだった。

白髪の老人姿は変わらなかったが、姿がひとまわり、小さ
くなったように見えた。

うわばみ

「……お前は、よくもおれを騙したな。

裏切りものには、それ相応の仕返しをせねばならぬ！

わがうらみ、わが苦しみを思い知るがよい！

これっ！」

SE 小判の音、ザラザラザラ……。

たのきゅう

どこからかきあつめたのか、気がつくと、家の中に、小判
の山が出来ていた。

これじゃまるで昔話だ。

このお金をつかって、私は村の中にちいさな芝居小屋を建
てた。あまったお金で、山のふもとに、山の生き物たちを祀
る、鎮守様のほこらを建てた。

いいことばかりのようだが、ひとつだけ、困ったことがあ
る。芝居小屋の出入りのたびに、いつもこうなのだ。

村娘 A 「たのきゅうさん、おはようございます。はいぼた餅！」

村娘 B 「ぼた餅なんて食べ飽きましたよね。そんなものより、私

のつくった甚兵衛、これから寒くなるんで着てください」

村娘 A 「ちよっと横から出てこないでよ。順番でしょ」

村娘 B 「あんたこそ何よ！ ちよっと押さないで」

※ 村娘両名 お互いに張り合う。

たのきゅう「……ともあれ、田能村におこしのさいは、ぜひ、芝居小屋

にもお立ち寄りください。

小屋の名前は「たのきゅう座」、ちょっと変わっています

が、うわばみの紋が目印です」。

SE チョンチョンチョン……（拍子木）。

芝居の幕が開く。

おわり

「たのきゅう」創作ノート

落語は義太夫や常磐津のような〈語り物〉の芸能同様、ひとりの語り手によって「地の語り」と「登場人物の台詞」が発語される。たとえば、落語においてはお花と半七の会話が交わされた次に、地語りの状況描写がなされ、それに引き続いて別の場所にいる番頭と丁稚の会話に移行する——というようなことが、ごく普通におこなわれている。つまり、登場人物たちの上位階層には、噺の全てを見通し、語りをすすめていく超越的な視点が存在する。

語り物の芸能にあっては、本質的には「地の語り」と「会話」を区別するものがない。語りは揺るぐことのない一人の語り手から発せられ、虚構世界をかたちづくっていくものでなくてはならない。落語は義太夫や常磐津、あるいは講談などの諸芸に比べて、いわゆる「地の語り」の比重が少なく「会話」の比重が高いために、聴き手にも、あるいは演者自身にもよく理解されていないように思えるのだが、落語の中に交わされる「会話」は構造的に「地の語り」の変形である。あるいは、「会話」を含めたすべての言葉が「地の語り」なのだと言っても良い。

落語に於いて、聴き手は「桂文楽」であるとか「三遊亭圓生」であるとかいった、語りをすすめていく——超越的ポジションを決定する——人物の存在を、テキスト以上に重要視する。これは噺の中の人物である「お花」や「半七」よりも語りのフレームを決定する「桂文楽」や「三遊亭圓生」のほうが上位階層に位置している以上、当然のことである。その証左として、寄席や落語会の多くは、いまでも出演者の告知だけをして、演目の告知をしない。しかし、これをさかさまにすることは考え

られない。観客は、演者がいかにしてフレームを決定し、独立した世界を立ちあげるのかを——それがつまり〈芸〉である——鑑賞するのだ。

一方で、大きく見れば近代劇のバリエーションであるラジオドラマは、落語や義太夫のようにフィクションの世界を外部（物語外）から維持する語り手の存在を通常持たない。

「たのきゅう」を例に取れば、落語の口演の場合、久兵衛の生活背景や、うわばみが復讐のつもりで金を投げ込むくだりの描写は、落語家（語り手）の「地の語り」で処理される。ラジオドラマには〈落語家による地の語り〉が存在しないので、同様の内容展開をするためには、大きく分けて三つの方法を選択する必要がある。

- ① 三人称的ナレーションによって語る。
- ② 複数の登場人物の会話によって語る。
- ③ 登場人物の内心独白によって語る。

私は「たのきゅう」の脚色にあたって、①の方法を回避したかった。物語外の語り手をもたないラジオドラマ、つまり近代劇のナレーションは、原則としてフィクションを浸食しない存在であることが求められる。わかりやすく言えば、それは無名の声による語り（いわゆる「天の声」）でなくてはならない。その語り口は平明でなくてはならず、つねに公正さを仮構したポジションから発せられる。

無論、この方法が効果をあげる場合もおおいにあるが、「たのきゅう」のストーリーにナレーションを導入した場合、「落語」の、とくに滑稽噺の生々しいニュアンスが後退し、あまりにも「昔話」に近くなってしまふと私は判断した。「たのきゅう」はもとともがお伽噺的なストーリー

であるから、内容をナレーションによって内包してしまうと寓話的なニュアンスが強まりすぎてしまうと考えたのである。

従って、今回は②と③の方法を選択することにし、②の役割を担う人物として、原話にはない「村娘A」「村娘B」を創作し客観描写をすることにした。久兵衛に追っかけがいるというのも、今回の創作である。

落語では、久兵衛が山に入ってから、彼から語りの視点（カメラ・アイ）が外れるということはない。しかし、今回は村娘兩名の存在によって、女子二名がぼやく、山中とは状況の離れた場面を挿入することが出来た。これは気分転換場面として機能したのではないかと思う。

後半には久兵衛の内心独白を配した。③の方法である。ここでは、村を離れ、母のもとへと急ぐ久兵衛の心のゆれ、またうわばみのことを思い返すときの、感謝や悔恨の入り交じった複雑なニュアンスを出すことを意図した。落語版にはこの種の独白的心理描写はない。また、久兵衛の内的独白のなかに、あえて「これじゃまるで昔話だ」という台詞を入れ、それによって「昔話」との距離をとろうとした——言うまでもなく「昔話」の中の登場人物は、そのストーリーが昔話的であるかどうかに関して言及をしない。

落語版では、うわばみが瀕死の重傷を負い、久兵衛に大金が転がり込んだという結末になる。私は以前からその結末にいささかの後味の悪さを感じていたので、うわばみのダメージを縮小し、人間の攻撃により、大蛇が神通力を失い、人を呑むことが出来なくなったと改めた。久兵衛が動物を祀るため祠を建てるのも今回の増補である。

原話では、久兵衛は「金が怖い」と語るだけだが、今回はそれに「女」を付け加えた。山中の茶屋場面を付け加え、ラストにも村娘が絡むようにした。うわばみの弱点が「煙草のヤニ」と「柿渋」であるのは

落語の通りなので、久兵衛の〈弱点〉も同数にしたという側面もある。

先年、物故した五代目立川談志は噺の末尾に「たのきゅうがこの金を元手に建てたのが、いまの歌舞伎座だよ」とホラばなしを付けていた。

今回はそれを下敷きに、久兵衛が自前の芝居小屋を建てることにした。

「うわばみの紋」というのも新たな工夫で、彼がうわばみに対して罪の意識と感謝の気持ちをもっていることを表現しようとした。

ラジオドラマ「井戸の茶碗」

二〇一三年一月一四日放送

(登場人物)

- ・ 屑屋の清兵衛 (25歳)
- ・ 浪人者 千代田朴斉 (ぼくさい) (50歳)
- ・ その娘、おゆき (17歳)
- ・ 細川家の家臣 高木作左衛門 (45歳)
- ・ 細川侯 (殿様) (42歳)

○シーン1・イントロダクション

現在の おゆき …… (素人が真似している落語口調で)

えー。縁は異なるもの、味なもの、袖すり合うも他生の縁、などと申します。親子の縁、主人と奉公人の縁、ご夫婦の縁、考えてみますと、どこで、どういう偶然が作用して、お互いが縁づいたのか。なかなか不思議でございます。これから申し上げますのは、江戸市中で、ひよんな縁から、一組の夫婦と二組の養子縁組が出来上がったという一席でございます。漸の幕開きは、そう、ある春の日の昼下がりのことでございます……。

○シーン2・目黒の路上

SE 町の雑踏・歩く音
清兵衛 「くずーい。おはらーい。いらなくずを良い値で買い取り

「落語のラジオドラマ化——その実践と方法」

松本尚久

ます。えー、くずーい、おはらーい……」

「(人目をばばかり) 屑屋さん、屑屋さん……」

「くずー……あ、はい？ 誰かお呼びでございますか？」

「屑屋さん、こちらです……」

「あ、柳の木に隠れて声をかけられては、なかなか気がつきません。失礼しました、なにか御用でしょうか？」

「ここからすぐ近くの裏長屋なのですが、くずを買い取っていただけませんか？」

「はい。屑を買わせていただくのが私の商売です。どこにでも参ります」

「ああ、よかった、それでは……どうぞ……こちらへ……こちらへ…… (空腹でしゃべれない)」

SE ドサツとへたり込む、倒れる音。
「ちょっと、あなた！ こんなところにへたり込んで……お体の加減でも悪いのですか!？」

「……いえ、あの、ちょっと」
SE グーッ (腹の鳴る音)

「あっ、これは。だいたい、事情はわかりました」
清兵衛

○シーン3・裏長屋・千代田朴斉の住まい。

SE ウグイスの鳴き声
清兵衛 「えーっと、本が十冊に、手拭いが三本。それから、短冊が五枚、すずりと筆がひとつずつ。そうですね、ひっくり返して、五十文、いや、六十文というところですよ」

朴 斉 「六十文でもいまの私には有り難い。

それでお願いをできますか」

清兵衛 「あまり値よく買えずにすみません。それから、お嬢さんがずいぶん空腹でいらっしゃるようだ。

少ないですが、これで何か腹の足しにしてください」

朴 斉 「いや、それはいけません。

今日は娘をこの長屋まで送っていただき、そのうえあなたのお弁当までお裾分けしていただいた。

これ以上のほどこしを受けるわけにはまいりません」

清兵衛 「これはかえて失礼を言いました。それなら、あと二十文、値よく買わせていただきます。これは決してほどこしではありません。よく見れば、これは良いすずりです」

朴 斉 「……ああ、いや……はて……(困る)」

清兵衛 「失礼ですが、あなた様、もとはお侍様とお見受けします。

お気に障ったらすみませんが……どうして、このような暮らしをされているのか、お聞かせ頂けませんでしょうか」

朴 斉 「はい。申し遅れましたが、私の名前は千代田朴斉。ここに

いるのは娘のゆきです。家内はとうに亡くなりました。わたしは、二年ほど前まで、ある大名家に仕える身でしたが、持って生まれた潔癖性で上役と衝突。

宮仕えをやめ……いまは浪人しております」

清兵衛

「では、日々の暮らしはどのようなに？」

「昼間は、町内の子供たちを集めて、素読の指南……簡単な読み書きを教えています。

夜は町に出て売朴……占いをしております。これでなんと

か暮らしを立てていたのですが、このところの雨続きで、ちと風邪を引きまして。

いよいよ釜の蓋が開かなくなったという始末です」

「これまでは父上の身の回りのことをしておりましたが、これからは私が勤めに出て、家計を助けようと思っています」

清兵衛 「ふーむ。お侍にはお侍の苦労があるのですね」

朴 斉 「はは。曲がったことが嫌いなたちで、いらぬ苦労をしているのです。

(思いつき)

そうだ、もうひとつ、あなたにこれを見て頂きたい」

現在のおゆき と言いました千代田朴斉。台所の神棚から、なにやら大事そうなものを抱えて戻ってまいります。

朴 斉 「さあ、これを」

SE おごそかな雰囲気……

清兵衛 「これは……美しい顔をした観音様ですね」

朴 斉 「先祖代々受け継いだ、仏像です。木像ですから、金目のものではありませんが、父はへなにかのときに役に立つものだ」とよく言っていました。

もし出来ましたら、この仏像も、あなたが買い取ってくださいませんか？」

清兵衛 「今度は私が困りました。

屑屋ですから、たいいていのものは買い上げさせていたのですが、残念ながら仏像や骨董のたぐいの値打ちがわかりません。一切、扱わないことに決めているのです」

朴 斉 「いくらでもかまいません。あなたの思った値で」

清兵衛

「そう言われましても……。」

では、こうしましょ。たいそう立派な観音様ですから、わたしがひとまず二百文、ここへ置かせてもらいます。

そして、骨董を扱う商売仲間や、お客様にこの観音様を見せますので、いくらかでも高く売れたら、その売上げを折半にするということでは」

朴斉

「それでは、あなたの儲けになりません」

清兵衛

「いえ、私のあだ名は、正直清兵衛。このほうが気が楽です。それでは、二百文で、この観音様、お預かりいたします」

現在のおゆき このとき、おゆきは……えー、私のことですが……

正直者の清兵衛に、ただの屑屋さんとは違う、なにかを感じておりました。そして、この出会いが、観音様をめぐる不思議な出来事のはじまりだったのです……。

○シーン4・細川屋敷近く

※ 清兵衛は路上。高木は屋敷の二階。

SE ウグイスの鳴き声

清兵衛

「くずーい。おはらーい。いらなくずを良い値で買い取ります。えー、くずーい、おはらーい……」

高木

「おーい、屑屋さん！」

清兵衛

「はて？ どこやらで呼ぶ声が……。とはいっても、声はすれども姿は見えず……？」

高木

「おーい、上だ、上だ、屋敷の窓から呼んでいるのだ」

清兵衛

「ああ、わかりました。細川様のお屋敷の二階ですね」

高木

「そうだ。いま、二階から下を見下ろしておったら、そなたの背負っている籠かごのなかに、なにやら仏像のようなものが見えたが、それはなんじゃ？」

清兵衛

「ははあ。これにお目留まりましたか。」

高木

「はい、仰るとおり、これは観音様の仏像でございます」
「なかなか良さそうなものであるな。ちと興味がある。
二階へ持ってまいれ」

○シーン5・細川屋敷内

SE ゴトゴト……。

(仏像の中に何かが入っている)

高木

「うーむ。上から見たとき、なかなかの作ではないかと思っ
たが、手にとってみると、何ともいえない品のある観音様
じゃ」

清兵衛

「あの一、私もさっきから気になっていたのですが、この観
音様、ゆらすと、なにやら音がします。」

これはどういうわけでしょうか？」

高木

「これか。(SE ゴトゴト……)」

これは「腹ごもりの仏像」といってな。仏像の中に、もう
一体、小さな仏像がおさめてあるのだ。むかしから、縁起を
かついだものだと言われておるな。

清兵衛

ふーむ、この品は、一体どこからでたものじゃ？」

「はい、目黒の近くにお住まいの、千代田様という、ご浪人
様からお預かりしたものです」

高木

「浪人者か……。仏像まで手放そうというお暮らし、相当に

お困りなのであらう」

清兵衛

「私が言うのもおこがましい話ですが、この細川様のお屋敷とは雲泥の差……。裏長屋で親子二人、お困りのご様子でした。なんでも、昼は子供たちを集めて、素朴な暮らしかたを教え、夜は町に出て梅毒の指南をするとかしらないとか……」

高木

「ははは。それを言うなら、昼は素読の指南、夜は売朴をしている」というのじゃらう。

よし。この仏像、わしに売ってくれんか」

清兵衛

「願ってもない話です」

高木

「わしは、細川家にながく仕える、高木作左衛門という者じゃ。その千代田氏とはちがい、生まれてこの方の独り者でな。ただひとつの道楽が、書画骨董のたぐい。ちょうど神棚に飾る仏像が欲しいと思っていたのだ。で、値はいかほどじゃ？」

清兵衛

「私が千代田様にお支払いした値が二百文。ですから、二百文より高ければいくらでも結構です」

高木

「ははは。これは正直のうえに馬鹿がつくお人だな。なら三百文ではどうだ？」

清兵衛

「三百文でお買い上げいただければ、百文の利が出ます。ぜひお願いをいたします！」

SE ジャラジャラジャラ……（一文銭の音）

現在のおゆき 仏像の商いに成功した清兵衛は、すぐに裏長屋へとつて返し、百文の金子をぴったり五十文ずつ、千代田朴斉と二人で（半分こ）にしました。
めでたしめでたし……。

と、ここで終われば、巷によくある、一寸いいはなし、なのですが、ここまではほんの発端でございます……。

○シーン6・細川屋敷近く

※ 清兵衛は路上。高木は屋敷の二階。

SE 道を歩く音

清兵衛

「くずーい。おはらーい。いらなくずを良い値で買い取ります。えー、くずーい、おはらーい」

高木

「おーい、清兵衛どの！ わしじゃ、わしじゃ！」

清兵衛

「はて、声はすれども姿は見えず……」

高木

「二階じゃ二階じゃ！ 以前に仏像を買った高木じゃ！」

清兵衛

「ああ、お二階の高木様！ お変わりないご様子で」

高木

「わしに変わりは無いが、たいへんなことがおきた。すぐに二階へあがってきてくれ！」

SE ジャラジャラジャラ……（小判の音）

清兵衛

「なんですか!? この小判は？」

高木

「先日、そなたから求めたあの仏像。少々、すすけておったのできれいにしようと思い、ぬるま湯にひたして洗っておるとな。台座の紙がはがれて出てきたのが金包み。中を改めると、小判で五十両の大金であった」

清兵衛

「すると、観音様の腹ごもりは……」

高木

「まさしく、小判であったのだ。わしは、仏像は買ったが、なかの小判まで買った覚えはない。第一、三百文で求めて、中から五十両出たのでは、なにかズルをしたようで寝覚めが悪い。この金を返さねばと思って、仕事もろくにせず、ここ

何日も窓から通りかかる人ばかりをながめておったのじゃ。
……おかげで首が痛いわ」

清兵衛

「では、ここにある五十両は」

高木

「千代田氏、といったか……その御浪人のところへすぐさま届けてもらいたい。お手間をかけるが、この高木作左衛門、世の中の間尺に合わないことは大嫌いだな。ひとつよしなに、頼む！」

○シーン7・裏長屋

清兵衛

「……という次第でございます。」

朴斉

「観音様の中から出た五十両。どうぞおおさめください」
「屑屋さん。申し訳ないがこの金は受け取れません。」
いま、父が言いのこしていたへなにかの時に役に立つ」という言葉の意味がよくわかりました。

この五十両は、ご先祖様が、いざというときのためにおさめておいてくださったものに違いありません。しかし、そんな有り難い仏像をなんの考えもなく売り払ったのはこの私。私にこの金を受け取る資格はありません。

お金は高木様にお返しください」

○シーン8・細川屋敷

SE カラスの鳴き声（夕刻）

清兵衛

「……という次第でございます。」

千代田様は金を受け取る気はない、とのこと。
この五十両は高木様がおおさめください」

高木

「それではすじが通らぬ。この高木作左衛門、いわれのない金は、びた一文、ふところに入れる気は無い。どうしてもと言うなら、この刀に掛けても受け取ってもらおうぞ！ そう伝えてまいれ！（刀に手をかけた）」

清兵衛

「ひえっ！」

○シーン9・裏長屋

清兵衛

SE 鶏の鳴き声（早朝）
「千代田様、もとはといえば仏像の中にあっただお金でございます。どうぞお受け取りを」

朴斉

「しつこいお人じゃ！ 受け取らんと言ったら受け取らん。いまは浪々の身の上とはいえ、この千代田朴斉、魂は武士。この刀にかけても受け取らんぞ！」

清兵衛

「ひえっ！」

○シーン10・両家の往復

SEのカラスの鳴き声と、鶏の声を交互に。

その間に高木・朴斉の「受け取らぬ！」「いらぬ！」

という声をサンドイッチする。

双方ゆずらず、それがなんども繰り返された。

高木・朴斉「この金は絶対に受けとらん!!」

○シーン11・目黒近くの路上

SE ガヤガヤ・道を歩く音

清兵衛

（弱々しい、疲れ切った声で）

「くずーい。おはらーい。いらなくずを良い値で買い取ります。えー、くずーい、おはらーい……」

おゆき 「あつ、いたいた。清兵衛さん！ 聞こえないのかなあ。

清兵衛 さーん！

「（朦朧として）えー清兵衛でござい。知らない清兵衛を良い値で買い取ります。清兵衛はー」

おゆき 「すっかりぼーっとしちゃって、私ですよ、ゆきですよ！」

「あつ、千代田様のおゆきさん……。すいませんちょっと疲れていまして」

おゆき 「お疲れの原因は私の父ですね」

清兵衛 「ここ何日も、千代田様と高木様のお住まいを行ったり来たり、足は棒になるし、なぜか私が叱られるし、もうふらふらです。ちょっとその茶店でお茶でも飲みましよう」

SE お茶を飲む音（または淹れる音）

「はーっ。生き返った。朝から何も食べずにかけずり回っていたもので。この団子はうまい。おゆきさんも一つどうぞ」

清兵衛 「いただきます。……すみません、父の強情でご迷惑をおかけして」

「お侍のこだわりというものが、ここまで激しいものとは。正直いって驚いています。昨日なんか、千代田様、刀に手を掛け、ご先祖に申し訳ないから切腹いたす！ って。なんですか、ありゃ」

清兵衛 「その性分で、ずいぶん損をしているのです。

「私が何か言うと、余計に怒るし」

おゆき 「私のような町人には、わからない話です」

清兵衛

おゆき 「清兵衛さんは、ずっとこのご商売を？」

清兵衛 「私はおさないころに両親をなくしまして。親代わりになっ

て私のことを育ててくれた、叔父の商いを継ぎました。屑屋とってばかにする人もいますが、私はこの商売がしょうに合っています。……色々な人と会えますしね」

おゆき 「買値を決めるのが大変でしょうね？」

清兵衛 「慣れればどうということはありません。

もっとも、この間の仏像や骨董品のたぐいは、私は目が届きませんが……」

そうそう。私たちの商売には「百両のカタに編み笠ひとつ」という言葉があるのです」

「百両のカタに編み笠ひとつ……？ ですか？」

おゆき 「ええ。私たちがくずを引き取るとき、このお客様とは長く付き合いたい。このお客様の言うことには嘘がない、と思っ

たとき、品物を相場よりも高く引き取るのです。

まあ、本当に百両の大金が動くことはありませんが、そういう気持ちで買値を付けろ、ということですよ」

おゆき 「それでは損をすることもあるのでは？」

清兵衛 「ええ、私はことに商売が下手で……損ばかりしています。

それでも、お客様の立場にならなきゃいけない、というのが叔父の教えでした。

〃百両のカタに編み笠ひとつ……ん？
百両の……そうか……！」

○シーン12・裏長屋

朴齊 「百両のカタに編み笠ひとつ……？」

清兵衛 「そうです。千代田様は、いわれない金は受け取れないとおっしゃいます。

では、こうされたいかがでしょう。

お金を受け取る代わりに、何かそれ相応の品物を高木様に差し上げるのです。そうすれば、これは立派な売り買いではありませんか。いわれない金ではありません」

朴齊 「うーむ……そう言われれば、それは確かに」

清兵衛 「そうと決まれば、何か高木様に差し上げる品物をお選び下さい」

朴齊 「とは言うものの、見ての通りの貧乏暮らし。見合った品物があるかどうか」

おゆき 「お父様、あの茶碗を差し上げてはいかがでしょう」

朴齊 「茶碗……。ああ、それがいい。あまり値打ちのありそうなものではないが、古いことは古い。これも親代々の品物で、以前は茶の湯に使っていましたが、いまは箱の中で眠っています。ちょっとまってください」

SE 箱の紐を解き、中を見せる

清兵衛 「おお、これはよい茶碗です。さっそくこれを持っていくことにいたします」

朴齊 「それから。私がお金をそっくり貰うのはどうも具合が悪い。私と、高木氏、そしてあなたの三人でお金をわけることにいたします」

現在のおゆき 清太郎が高木作左衛門のところへ茶碗を届け、これこれの訳でございまずと説明すると作左衛門も得心。

五十両の金子を、まず千代田朴齊に二十両、高木作左衛門に二十両、間に入った手間賃として正直者の清兵衛に十両と三分割して、それぞれのふところへ。さらに、朴齊の茶碗が作左衛門のもとへとわたりました。

さて。このおはなし、ラジオドラマになるくらいですから、江戸っ子も放っておきません。町中のひとの評判になり、ついには高木作左衛門の君主、細川家のお殿様にも、その噂がとどくようになりました。

○シーン13・細川侯のお部屋

SE おごそかな触れ太鼓。ドーン、ドドドーン。

殿様 「これがいま評判の茶碗であるか。

なかなか見事な代物である。

また、わが家臣とは言いながら、仏像から出た金をひとりのものにしようとせぬ、高木作左衛門の心根は潔白。

褒めてつかわずぞ」

高木 「ははーっ」

殿様 「おなじく、浪人の身の上ながら、立派な振る舞いの千代田氏、正直者の清兵衛。いまだ対面はせぬが、いずれもあっぱれじゃ」

高木 「ははーっ」

殿様 「ところで。この茶碗、出入りの茶人にも、このたびの話と併せ、見せたいと存ずる。

しばらく借りてもよいか？ まあ、この流れで言われたら、そなたも断りにくからう。ははははは」

○シーン14・細川屋敷 数日後

SE ジャラジャラジャラ……（小判の音）

清兵衛

「な、なんですか？ このお金は？」

高木

「清兵衛殿。いやはや大変なことになってしまった。

茶碗が三百両に化けてしまったのだ」

清兵衛

「さ、三百両に？」

高木

「殿に求められるまま、例の茶碗をお見せしたまではよかったのだが……。殿様はこのたびの話をたいそう気に入ってな。出入りの大名、茶人、文人などに話を聞かせ、茶碗を見せておったのだ。

すると、わが屋敷によく出入りをしている、中島誠三郎という骨董の鑑定士が、茶碗に目を留めたのだ」

清兵衛

「私でも名前は存じています。

「良い仕事してますねえ」という決まり文句の……」

高木

「その中島先生だ。そして、茶碗を上げ上げみつめると、これは高麗の名器『井戸の茶碗』に相違ないと断言をしたのだ！」

回想の殿様（すこしエコーで）

「出入りの鑑定士、中島誠三郎が申すには、これぞまさしく高麗より伝来の名器『井戸の茶碗』。

世に二つという逸品に間違いないということじゃ。

また、この茶碗にまつわる三人の男の働きが、余は気に入った。

どうじゃ。

清兵衛

この茶碗、三百両で余にゆずってはくれぬか。
まあ、この流れではそちも、いやじゃとは言いいくからう。こうしてあたまをさげよう。わはははは」

高木

「それで、ここに三百両が……」
「またかと言われるであろうが、みども、この金を受け取ることとは出来ぬ。清兵衛殿、半分で良いので、千代田氏にこの金を届けてくれぬか」

清兵衛

「半分、といっても百五十両の大金」

高木

「千代田氏の性分からいえば、とても素直に受け取れるとは思われぬが……（ため息）」

清兵衛

「……話すだけは、話してみますが、そう簡単にはいかないかもしれません。

高木様。今回は私と一緒に、千代田様の長屋へ一緒に願え

ませんか」

高木

「はあ……気が重い話ではあるな……」

○シーン15・裏長屋

SE ウグイスの鳴き声

高木

「……というような次第で、千代田様の茶碗はこの三百両に姿を変えました。なにとぞ、半分だけでも受け取っては貰えませんか」

朴斉

「いや、先祖伝来の茶碗を売り渡したこの千代田朴斉に、どうして金をうけとる資格がありましよう」

高木

「そう言われるであろうと思いますが、それでは私が困る。そうだ、それでは、以前のように、また何か私が品物を頂戴

するということでは……」

朴 斉 「しかし、もうここには何もありません」

朴 斉・高木 「押し問答風になる「しかし」「そこを何とか」

おゆき 「『百両のかたに編み笠ひとつ』。……と申します。

高木様をお願いします」

高木 「おゆきさん……といいましたな。何か名案が？」

おゆき 「はい。そのお金の代わりとして、この「私」を受け取って

ください」

男 三 人 「なんと??」

おゆき 「もし、私でよければ、お子様のいない高木様の養女にして

頂けませんか。家事万端、一通りのことは出来ます。

ただし」

男 三 人 「ただし？」

おゆき 「ひとつ条件があります。私には欲しいものがございます」

男 三 人 「ほしいもの？」

おゆき 「ここにいます清兵衛さんです。私はいままで、こんなに心の

きれいな、正直な人であったことがありません。清兵衛さん

さえ、おいやでなければ、これからの生涯をともしたく存

じます」

清 兵 衛 「おゆきさん……」

おゆき 「そして、清兵衛さんは、私の父、千代田朴斉の養子になっ

てくださいますか。父は、あなたのことを大層気に入って

います」

男 三 人 「とうとう……?」

おゆき 「私が高木様の養女になり、清兵衛さんが千代田朴斉の養子

になり。私と清兵衛さんが一緒になるのです。つまり」

男 三 人 「つまり？」

おゆき 「千代田の家と高木の家は、親類になるのです。

こうすれば、もうお金をかける必要もありません。

(がらつと変わって) このアイデア、どうかしら？」

男 三 人 「はは。おそれ、入りましてございます！」

M エンディング

現在のおゆき 往來を歩く屑屋さん呼び止めたのも何かの縁。

屑屋さんに観音様を預けたのは、これ仏様のご縁。

いちばんに不思議なのは男女の縁。

清兵衛とおゆきの子供が通っているのは幼稚園。

……いや、これは時代が違いました。

むかしから、江戸っ子連中が語り伝えました、

井戸の茶碗の物語。

うわさの茶碗は、いまでもどこかの蔵に、

ちゃわんと眠っているそうです。

おわり

「井戸の茶碗」創作ノート

「井戸の茶碗」は講談の演目を落語に移植したものである。講談では「細川の茶碗屋敷」とも呼ばれている。

今回の脚色では、とくに結末に大きな改訂をほどこした。

落語版では、数百両の大金の始末に困った千代田朴斉が、そのかわりとして「娘」を高木作左衛門に嫁がせるという結末になる。この展開には、娘本人の積極的な意志が無く、朴斉の発案に娘が同意するという処理がなされている。また、落語では、朴斉がこのアイデアを思いついた時点で、千代田朴斉親子と高木作左衛門はまだ一度も対面をしておらず、千代田は清兵衛経由で耳にした情報だけをもとに、娘を高木に嫁がせたいと申し出るようになっていく。同様に、高木も娘に一度もあわないまま、縁談を承知する。

右のようなストーリー展開は、封建時代の家庭観、結婚観を保存しないしは反映させたものとしての資料的価値はあるが、私は現代のドラマとして「井戸の茶碗」を再構成するにあたり、これを反転させ、千代田朴斉の「娘」を物語の中心に据えたいと考えた。

原話では娘の台詞は、冒頭の清兵衛を呼び止める場面のほかにほとんどなく、たとえば古今亭志ん朝の口演速記では人物名すらない（『志ん朝の落語2』ちくま文庫）。

私は娘に「ゆき」という名前を与え、彼女がみずからの意志によって行動するようにアレンジした。原話には無く、今回の脚色によって増補されたシーンは以下の通りである。

① 五十両の金の処理に困り、憔悴した清兵衛に声を掛け、話をする。

② 五十両のかわりとして、「茶碗」を渡すことを思い付き、父親に進言する（原話では千代田朴斉が思い付き）。

③ 大詰、千代田朴斉、高木作左衛門、正直清兵衛が一堂に会した場で、みずから高木の養女になることを申し出、さらに清兵衛にプロポーズをする。

もっとも重要な改訂点は言うまでもなく③である。行動が強い意志に支えられていること、また結婚相手として「屑屋」をしている清兵衛を選ぶことにより、彼女に自由な人間性を与えようという意図した。

余談になるが、現行の「井戸の茶碗」では、千代田が大金のかわりに娘を高木に嫁がせると発案するくだりで、清兵衛が「そりゃいい、高木様はきっとお貰いになります。高木様がいららないと言ったら私が貰います」と軽口を叩くと、千代田が「お前にはやらぬ！」と一喝するギャグを入れる演者が多い。私はこのギャグを好まない。それまでの清廉な千代田朴斉のキャラクターが壊れ、屑屋を見下した発言をしているように聞こえるからである。

また、浪人者とはいえ、武士の娘が屑屋に求婚するだろうか、という考証的な側面はあえて無視した。山中貞雄監督の映画『丹下左膳余話 百万両の壺』には昼間、屑屋で生計を立て、夜にはこざっぱりとした着物に着替えて楊弓場に遊びに行く人物が登場する。年格好は違うが、私のイメージする清兵衛は、あのような清潔感のある人間である。

ゆきと清兵衛が結ばれるという結末から逆算して、今回の脚色では高木の年齢を四十代に引き上げた。原話では二十代とおぼしき設定になっている。生来の独り者で、書画骨董だけが趣味という人物像も台詞で強調した。原話と違い、高木の嫁取りは消滅したわけだが、高木、千代田、

清兵衛の三者がゆきの意志と知性によって、それぞれの「富」を得ることにした。

また、今回はゆきをストーリー全体の語り手として位置づけた。

語りの方法としては、一人称的な内的独白ではなく、噺の顛末を俯瞰する三人称的な視点を採用した。この形式が彼女の、状況を把握する知的な人物像に見合うと判断したためである。

さらに、語りの趣向として、オープニングとエンディング、また途中数か所に彼女が落語家風の口調で聴き手に直接語りかける方法を使った。なぜ「ゆき」本人のキャラクターではなく落語家風の語りをするのかという理由は二つある。ひとつは、ここで語られる内容が、落語という滑稽を主眼においた芸能の口調によって相対化出来るほど、語り手である「現在のゆき」は「余裕」のあるポジションに在るということの表現。それは同時に、語られる内容がすでに過去完了した「過去」に属するものであることを示す。「現在」のゆきが、「過去」の騒動を回顧し、ユーモラスに語っていることが、彼女自身の語りによって聴き手に明示される。この構図を徹底するため、ドラマの冒頭で、一組の夫婦と二組の養子縁組が出来るといふ結末を明かしている。これは、通常の落語（滑稽噺）にはない時制の設定である。

「井戸の茶碗」の内容はこの語りの方式に適していた。それは、このストーリーが講談にルーツを持つということと無関係ではないだろう。落語の滑稽噺が、原則的には現在進行形の出来事としてストーリーを語るのにくらべ、講談は過去に完了した出来事を語り伝える構造を持っているからである。

ちなみに、講談ではさらに続きがあり、細川侯が井戸の茶碗を田沼主殿頭意次に献上、田沼が返礼として呉服橋脇の土地を与え、細川家がこ

こに屋敷を建てるという顛末になるが、こうした要素は今回すべて除外した。

ラジオドラマ「お菊の皿」

一月二二日放送

(登場人物)

- ・お菊 (20歳)
- ・タカシ (高校生・映画研究会) (17歳)
- ・トモコ (高校生・映画研究会) (17歳)
- ・コウスケ (高校生・オタク) (16歳)
- ・テレビ局の女子アナウンサー (30歳)
- ・社会学者・宮谷先生 (41歳)

○シーン1・放課後の高校(映画研究会撮影シーン)

SE 学校のチャイム↓下校する生徒達のガヤガヤ
それにかぶって不気味なBGM(オルガンのな)

……

トモコ

「……よくもこの城の秘密をさぐりあてたな。

このことを知ったからには、お前の命はわらわがもらった。

覚悟するがよいぞ……」

タカシ

「さて。話を聞け！」

トモコ

「逃げようとしても無駄なこと。

わが、ノイシュヴァイン家では、おまえと同じようにいやしき心をもった男どもが、何百人となく正義の刃の露と消えたのじゃ」

タカシ

「わかったぞ、古井戸の底にあった骨は……」

トモコ

「その通り。みな、わが、ノイシュヴァイン家の家宝を狙ったものたちの末路じゃ。思い知るがよい！」

○シーン2・放課後の高校(映画研究会部室)

SE サーベルを抜いた！(以下立ち回りSEあり)

「うわーっ。だれかー、だれかー」

「えいっ！ えいっ！」

「……ちょっと、あの、振り回しすぎ……あぶないって」

「さあ！ どうじゃ！ えい！」

「……あぶない！ 近づきすぎだって、ほら、うわーっ！」

SE 小道具のサーベルがタカシの脳天へ！

SE ……XYZY@\$！(タカシが倒れた)

SE 古時計か何かの音(時間経過の意)

「(F・IN) タカシ、タカシ、しっかりせえ……」

「うーん(むせる)。あゝ頭がずきずきする……」

「ゴメン、ゴメン。大丈夫？ ちょっとマジになりすぎちゃってさ。もう落ち着いた？」

「……あれほど、本気で振り回すなっていったろ！

もうこれで何度目なんだよ！ お前の『名演技』は」

「(得意になって) えーっ！と裏山での決闘場面と、悪い貴族を退治する場面と……今日で三度目、かな」

「だめだこりゃ、ぜんぜん反省してない。

学校のチャペルで、許可無しの撮影していたことがばれたらまずいってわかってるのか？ おれたち映画研究会は、それでなくても目を付けられているんだから！」

「大丈夫、大丈夫。コウスケ君と片付けもちゃんとやったから」

コウスケ

「でも、あの立ち回りのおかげで迫力あるシーンがとれました。トモコさんの表情が、本物の女剣士みたいでかっこよかったす」

トモコ

「よっ、名女優」

タカシ

「自分でいうな」

コウスケ

「これまでに撮ったぶん、うちのパソコンでぎっと繋いでみたんですけど、けっこう雰囲気です。本当にヨーロッパの国みたいで。外国、行ったことないけど」

タカシ

「それだけはこの学校に感謝するよ。この校舎、創立者が戦前からの修道院を改築して学校にしたらしいからな。」

映画撮影のためにあるようなもんさ」

トモコ

「しかし、私たちの趣味ってばらばらだねー。」

私がやりたいのは宝塚みたいな歴史ロマンの世界で」

タカシ

「コウスケは特撮怪奇映画オタクで怪奇もの専門！」

おれが好きなのはフランスのアート作品。しかたないから、幽霊の出るヨーロッパの古い城で、男装のお姫様が活躍する物語を、芸術的にアレンジして撮るといふことにしたんだ」

トモコ

「題して【ノイシュヴァイン家の古井戸】。いいじゃん」

タカシ

「……いいかあ？」

コウスケ

「おれ、撮ってて楽しいっす」

タカシ

「……ま、なんだかんだいって、おれも楽しいよ。」

撮影はもう折り返しまできた。いちばんの問題は……」

トモコ

「（幽霊口調で）古井戸から幽霊が出てくるシーン」

タカシ

「この学校にも古井戸はないからなあ。ロケ場所をどうするか」

コウスケ

「あのーそれなんすけど。いまネットで話題になってる、皿屋敷、とかお菊の井戸って知ってます？」

タカシ

「皿屋敷……って、あの昔の怪談に出てくる、あれか？」

コウスケ

「あ、それっす。井戸の中からお菊さんって幽霊が出てきて、うらめしやうって言ったり、一枚、二枚って皿の数を数えるんすけど、いつも数が足りないっていう」

トモコ

「わたしも何かで読んだことがある」

コウスケ

「その、お菊の井戸ってのが、まだあるらしいんす。場所は番町ってところで、まわりはビルだらけなんだけど、なぜかそこだけ更地のままで、井戸も昔のままあるって」

トモコ

「へえ。ちょっと面白そう」

タカシ

「ふーん。そこにいけば、古井戸がそのまんまあるってわけか……」

トモコ

「うってつけじゃん。そこで撮影しようよ。あ、でも巨匠タカシ監督はこうみえて臆病だから、もしかして怖い……？」

タカシ

「ば、ばかにするな。よーし、それなら明日撮影しよう。」

トモコは、明日は幽霊役。わるいけど、衣装はまた自前で頼む。コウヘイは、カメラと照明、音声兼任。たのむな」

コウスケ

「了解っす」

トモコ

「（幽霊口調で）それでは、監督、明晩をお楽しみに」

○シーン3・番町皿屋敷の跡地

SE 風の音・コウモリの鳴き声（不気味な雰囲気）

トモコ

「へえー。東京のまんなかにこんなところがあるんだねー」

コウスケ

「たぶん、その木の先に、古井戸があるはずっす」

SE 草むらを歩く音

トモコ 「あ、あれじゃない？ 石造りのけっこう大きな井戸」

タカシ 「(本当は怖い) えー、今日は風も寒いし、なんだか空模様

も悪いようなので、早めに撮影をして、早めに撤収。学校で
リハーサルしたことだし、いきなり本番でいこう」

コウスケ 「寒いっすか？ なんか風が生暖かいっすよ」

タカシ 「いいから！ コウヘイは早くアングルを決めてくれ」

コウスケ 「そうっすね。ちょっと高めから狙いたいの、あっちの塀
の上にのぼります。監督のスタートでカメラ廻しますから」

トモコ 「私は衣装に着替えてくるよ。すぐ戻ってくるから、覗かな
いでね」

タカシ 「そんなことするわけないだろ。衣装をつけたら、井戸のう
しろにかくれてくれ。そこからゆっくり伸び上がって、台詞。

いいな」

トモコ 「了解」

SE 風の音

コウスケ 「監督。ライト付けまーす」

タカシ 「おう。……ん？」

あれ、トモコもうスタンバイしているのか。

いつの間に着替えたんだ。もう準備はできたのか？!!

(間)

ちっ。返事ぐらいしろよ。あーわかったよ。どうせまた
役に入ってる。とか言うんだろ。よし、じゃあ、本番いく
ぞ。用意、スタート！

SE 古風な三味線、太鼓のBGM

お菊

「……うらめしや、鉄山殿。幾たび数えようとも一枚足りぬ
この皿は、そなたが仕組みしものであったか。

一枚、二枚、三枚、四枚、五枚……」

「なんだこりゃ。台詞が違うぞ。おい、リハーサル通りや
れ！」

お菊

「六枚、七枚、八枚、九枚……一枚足りぬを我が身の科とし、
理不尽な折檻。この恨み晴らさでおくべきか」

「だいたい、その衣装はなんだよ。ヨーロッパに白い着物は
無いだろう！ それは日本の幽霊！ ばか、やり直し！」

お菊

「……やりなおしとは、うらめしい……」
「待たせてゴメン。メイクに手間取っちゃって」

トモコ

「トモコ……なんでお前ここにいるんだよ」
「暗くてなかなか着替えられないし。

タカシ

あれ、だれ？ あのひと」
「お前がここに……ということは、あの古井戸から出て
きた女は……つまり……つまり……」

タカシ

「一枚、二枚、三枚、四枚」(だんだんエコー大きくなる)

お菊

※ タカシは目を回してしまふ。

○シーン4・テレビ番組(後日)

M 報道番組的な音楽

SE ガヤガヤ(お祭りのな)

女子アナ

「クローズアップ現代社会。
今日はいつものスタジオを飛び出して、いま社会現象にな
っている「お菊の皿」騒動について、生中継でお伝えします。

ここは、東京都心に位置します、皿屋敷の跡地と伝えられている場所です。ご覧の通り、夕方から、大勢の若者達が古井戸を遠巻きにしています。

ゲストの社会学者・宮谷慎司先生にお話しを伺います。

宮谷先生はこの現象、どう分析をされますか？」

「はい。まあこの種の都市伝説というのは昔から、口裂け女とか、人面魚とか、いろいろあったわけですね。

ただ、むかしは特定の地域の中での「クチコミ」というものでこうした話が広まっていったわけです。いまの都市伝説は、インターネット、ツイッター、そういうものを媒介にして、爆発的に広まっていく。いわゆる〈祭り〉と呼ばれる現象ですね」

女子アナ
「古井戸から出てくるお菊、と呼ばれる女性は何者なのでしょう
うか」

宮谷
「これは、もともと江戸時代からよく知られた怪談なんです
ね。番町皿屋敷、とかお菊の皿……と呼ばれる話でしてね。

お菊という地方から出てきた女性が、青山なにがしという家に奉公をするんですが、その家の跡取り、青山鉄山という男がこのお菊にほれてしまう。何とかお菊を口説こうとするんですが、お菊はイエスと言わない。というのは、彼女は田舎に三之助という、いいなづけがいたんですね。

さあ、頭に來た青山鉄山は可愛さ余って憎さ百倍。
彼女に意地悪をするんです」

女子アナ
「どんなことを？」

宮谷
「お菊に管理をさせておいた先祖伝來、十枚組の皿を一枚、

隠してしまうんです。その上で、お菊に「一枚をどこへ無くした。皿は家宝の品である」と責め立て、ついには庭の井戸の上で吊し斬り。なきがらは井戸に放り込んでしまったという、ひどい話です」

女子アナ
「そのお菊さんが幽霊になるのですか？」

宮谷
「そうです。夜な夜な、古井戸の中から姿を現すと、「一枚、二枚」と皿を数える。九枚まで数えると、青山鉄山にものすごい形相で怨み言をいう。鉄山はついに、ノイローゼになって衰弱死。この青山という家もお取り潰しになったと言います」

女子アナ
SE お寺の鐘
「あっ。お話しの中でありますがそろそろお菊さんが現れる時刻です。果たしてお菊さんは現れるのでしょうか？」

SE 古風な三味線、太鼓のBGM

お菊
「……うらめしや、鉄山殿。幾たび数えようとも一枚足りぬこの皿は、そなたが仕組みしものであったか。

女子アナ
「出ました。あれはまさしくお菊さんです。白い装束にロングの黒髪がくっきりと栄えています」

お菊
「六枚、七枚、八枚、九枚……よくもわれを殺めたな。

この恨み晴らさでおくべきか」

女子アナ
SE 大歓声

「これぞ日本の伝統美。こちらは大変な盛り上がりです！」
SE プチッ（途中でテレビを切る）

○シーン5・映画研究会 部室

トモコ 「なーんか、あっと言う間に話題になっちゃったね、

お菊さん」

タカシ 「そうだった責任の半分は、コウスケにある！」

コウスケ 「いや、おれそんなつもりなくて。カメラに録れてたお菊さ

んが、あんまり見事だったんで、友達にちょっとだけ自慢し
たくって。動画サイトにアップしたら、それがあっという間に……」

タカシ 「おまけに、お菊さんを見て目を回すおれのすがたまでシッ

カリ映ってるんだから、おれは学校中の、いや世界中の笑い
もの！」

トモコ 「いまさら言ってもしょうがないって」

タカシ あの夜のことを話しておく必要があるだろう。

生まれて初めて対面した幽霊の姿に目を回したぼくは、気
がつくと、石造りの部屋の中にいた。

トモコとコウスケ……それにお菊さんがぼくの顔をのぞき
込んでいた。

） 以下回想 ）

回想のお菊（愛嬌のある東北弁でありたい）

「あんれえ、監督さんはようやっと思を覚ましたみてえだ
な。まんず、怪我もねえようだし。よかったよかった。

せめえとこだけれども、ゆっくりしてたらええよ。
いまコーヒーでもいれるからね。怖いことねえよ」

トモコ 「この人、体は大きいのに臆病なんだよね！」

タカシ 「……ここは、いったい？」

回想のお菊「井戸の底さあ。下の方は広くなってるんだ。あたしはほら、

幽霊だかんね。昼も夜もここにいて、夜になると、上にあ
がってちょっと仕事するんだ。いつときは随分、暇だった
けど、こんなところ、おめえ様みてえな若い人がちよくちよ
く来るみてえだな」

タカシ 「あの、お菊さんは、江戸時代からずーっとここにいてるんで

すか？」

回想のお菊「そらそうさ。本当は、ぼちぼち日当たりのいいところに引

越してえとも思うけど、あても無いしねえ……」

タカシ 「心なしか、幽霊のときと、言葉遣いが違いますね」

回想のお菊「ああ、あれは、幽霊の台詞だかんね。芝居の真似っさ。

本当のあたしは、東北から出てきて、奉公していた娘っこ。
いつまでもなまりが抜けなかったんだ。

はいコーヒー」

タカシ 「あ、ありがとうございます。おいしいですね。

ん？ ここに飾ってある男の人の絵は？」

回想のお菊「ああ、これは田舎にいたころ許嫁だった三之助さん。

結局、再会は出来なかったけどね……」。

そろそろ落ち着いたかい？

この部屋の奥のドア。そこが地下鉄の番町駅につながって
るから。落ち着いたら、そこから帰るといいよ。

地下鉄の風ってけっこうあったかいんだよね」

トモコ 「あっそうか。

それでここはあったかい風が吹いてるんだね」

タカシ

素顔のお菊さんは、東北出身の純朴な女の子だった。

彼女の話をまとめるところなる。もともとは青山鉄山を呪うために行っていた幽霊での活動だったが、それが江戸中の評判になり、芝居になったり幽霊画になったりするうちに、引っ込むタイミングを失い、今日に至ったのだそうだ。

（ 回想おわり ）

○シーン6・番町皿屋敷の跡地

SE お祭りの喧噪

トモコ

「もういちどお菊さんに会いたいと思って古井戸に来てみたけど……」

タカシ

「この人混みじゃ井戸にも近づけないよ。うへえ」

コウスケ

「なんか雰囲気なくなったっす」

M 報道番組的な音楽（

女子アナ

「クローズアップ現代社会。

今日は、大反響につきまして、ここ番町皿屋敷から、深夜のアイドル、古井戸のお菊さん生中継、第十三弾をお送りいたします。今夜も、社会学者の宮谷慎司先生をお迎えしています。先生、この怪談が若者を引きつける理由は？」

宮谷

「ひとつは井戸の存在だと言えるでしょう。」

人間は潜在的に、井戸に対して魅力とおそれを感じます。

そこでは、意識の下にある何かがあらわになるのではないかという感覚ですね。ですから、近年、話題になった日本製のホラー映画でも井戸が重要な役割を果たします。

さらに……」

女子アナ

SE お寺の鐘
「お話しの中ですがそろそろ今夜もお菊さんが現れる時刻です。登場を待ちたいと思います！」

お菊

SE 派手なBGM（2001年宇宙の旅的な）
「明らかに前回よりもくさく……うらめしや、鉄山殿。

女子アナ

幾たび数えようとも一枚足りぬこの皿は、そなたが仕組みしものであったか。一枚、二枚、三枚、四枚、五枚……」
「いつにも変わらず魅力的なお菊さん、ですが、このところ少し芸が派手になっていませんか？」

宮下

「まさに大衆社会の要請というものです」

お菊

「六枚、七枚、八枚、九枚……おのれ鉄山。よくもわれを殺めたな。この恨み晴らさでおくべきか」

SE 大歓声（

お菊

「みなさん。寒い中、いつもありがとうございます。」

今日は、特別サーヴィスとして、みなさまに感謝をこめてこの歌をお送りします!!

♪ 有り難うって伝えたくて（

あなたをみつめるけど（

SE 歌声に大歓声かぶる

○シーン7・番町駅地下鉄通路／井戸の底

タカシ

「おい、たしかこの扉だったよな」

トモコ

「だれも見えてないから大丈夫だよ」

タカシ

「よし、入ろう」

SE ギイ（

お菊

「(鼻歌を歌っている)」

♪ あなたって不思議だわ あなたっていくつなの?

シャベリエルな シュベリエルな あなたはマドンナ」

(他の曲でも可)

タカシ

「お菊さん、お菊さん!」

お菊

「(酔っている) あんらあ、このあいだの監督さんでねえか。

遠慮しねえでこっちさ入ったらええよ」

トモコ

「このあいだは、ありがとうございました」

お菊

「わざわざお礼を言いにきたのかい? 義理がてえことさ

なあ! そんなことより、届けものの御神酒があるから、一

杯飲まねえか?」

タカシ

「ぼくたち、高校生なので」

コウスケ

「あの……勝手に動画をネットに出してすみませんでした」

お菊

「なあゝに、お礼を言いたいのはこっちのほうだよ。ネット

動画のおかげで、お菊の人気は40年ぶりの再ブレイク。見物

人の数はうなぎのぼりだし、雑誌にだって出たんだよ。

ほらこれ「月刊ゴーストライター」。

人気幽霊ランキング

タカシ

第七位だよ!」

お菊

「……おめでとうございます」

「こんどは、マツコデラックスの番組にゲスト出演しません

部員三人

「……は、はあ……」(呆れる)

○シーン8・映画研究会部室

タカシ

「短い間に、人間って、いや幽霊ってあんなに変わるものな

トモコ

「考えてみたんだけど、いまのお菊さんには、なんで幽霊を

タカシ

やってるのかっていうテーマがないんだよね」

トモコ

「もともととは、意地悪な主人、青山鉄山への復讐がねらい

コウスケ

だったんだろう?」

タカシ・トモコ

「でも、その青山鉄山はとっくのとうに呪いであの世行き。

トモコ

復讐は果たしているわけじゃん。だとすると」

コウスケ

「思うんですけど、おれ、あの壁に貼ってあった三之助さん

タカシ・トモコ

という許嫁の人が気になっていて」

コウスケ

「あの人に気が残って、幽霊がやめられないのかも」

タカシ

「それだよ。あの三之助って人に関して、なにか情報はある

コウスケ

のかな」

タカシ

「調べてみるっす」

タカシ

「調べるっす」

各方面に波紋も広がっています。

まず、お菊さん観覧チケットの偽物を売りさばく詐欺行為が行われ、すでに数人の被害者が出ています。また、お菊さんの真似をして井戸に入りたがる子供たちが続出。PTAが問題視をしています。こうした騒動のため、東京都は明日、皿屋敷跡地一帯の再開発に着手することを発表しました。今後の動きが注目されます」

SE お寺の鐘

女子アナ 「と言っているうちに、今夜もお菊さんの登場時刻となりました！」

SE 派手なBGM（前回よりも派手）「ドカーン！」

女子アナ 「すごい！ 今夜のお菊さんは宙乗り、フライングでの登場です！ まさに伝統と現代の融合です！」

お菊 「（大仰に）……うらめしや、鉄山殿。幾たび数えようとも一枚足りぬ、この皿は、そなたが仕組みしものであったか。一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚」

SE 大歓声

お菊 「十枚、十一枚、十二枚……」

SE 観客のザワザワ（??）

女子アナ 「どうしたことでしょう。お皿の数は九枚と決まっているのに、今夜のお菊さんはそのまま数を数え続けます。」

十三枚、十四枚、十五枚……。前代未聞です」

お菊 「十六枚、十七枚、十八枚……おしまい」

SE 観客のザワザワ（??）

お菊 「みなさん、今夜はみなさんにお伝えしなくてはならないこ

とがあります。色々と考えたのですが、私は今夜限りで、幽霊を引退して、普通の霊魂として第二の人生……いや第二の死後の生活を送ることにしました。本当は明日、引退をしようと思っていたのですが、もうあまり時間がありません。そのため、今夜、明日のぶんまでまとめて皿を数えました。どうぞお許し下さい」

SE 観客（ええー！）

お菊 「わたし、普通の霊魂になりたい！ みなさん、さようなら！」

お菊のこと、忘れないでくださいっ！」

SE 大きな風の音

○シーン10・学校（後日）

SE 雀の鳴き声（春）

タカシ お菊さんの引退を後押ししたのは、じつは僕たちだった。

騒ぎの発端をつくってしまったコウスケがお菊さんの田舎にまで出かけていき、彼女の許嫁、三之助さんが書き残した日記を書き写してきたのだ。

「私が生涯をともしにする女はお菊ただひとり。お菊があの世のものとなったいま、私は生涯、メスネコ一匹、我が身に近づけることはいたしません。そして、来世でお菊と一緒にいるつもりです。三之助」

タカシ 三之助さんの心のうちを知ったお菊さんは、もう古井戸で怨み言を述べる必要がなくなったのだ。

そして、皿屋敷一帯の再開発がはじまる前夜に、その活動

を停止した。お菊さんが、その後、どうなったかって？

やっぱり、気になりますか？

コウスケ

「ではテストいきまーす。よいい、スタート」

トモコ

「……よくもこの古井戸の秘密を目にしたな。」

このことを知ったからには、お前の命は亡きものと思え。

さあ、一緒に黄泉の国へまいるのじゃ」

お菊

「ああ、そうでねえよ。もうちょっと上目遣いに、それから

幽霊らしく肩を落とさねばいけねえよ」

トモコ

「これは西洋の幽霊だから、これでいいんです！」

お菊

「西洋だろうがなんだろうが幽霊は幽霊にちがいなかる!?

先輩の言うことに無駄はひとつもねえよ！」

お菊・トモコ（演技に関して言い合う）

タカシ

お菊さんは、田舎に帰ると言っていたのだが、そのまえに

立ち寄ったぼくたちの学校が気に入ってしまい、だれも使っ

ていないチャペルの屋根裏部屋に住み着いてしまった。

日当たりがいいので、しばらくはここでゆっくりしたいと、

のんきなことを言っている。

（ひそひそ）

……意外だったのは、お菊さんの運動神経がいいこと。

いちばん上手なのは、フリスビーです。

あんまりよそでは、言わないでくださいね。

おわり

「お菊の皿」創作ノート

原話である落語そのものが、広く知られた「番町皿屋敷」の巷説を滑稽化した佳作である。

落語は時代物浄瑠璃や歌舞伎脚本と違い、本説（典拠・元ネタ）との結びつきを持つ作品があまりない。これは徹底して世話（プライベートル）の空間でストーリーを展開し、時代（パブリックな出来事、歴史）にコミットすることを回避する落語の根本原理を反映したものである。

現行作品のなかでは「狐忠信」の伝説を下敷きにした「猫の忠信」、浄瑠璃の「夏祭浪花鑑」をパロディ化した「土橋萬歳」、あるいは累伝説の三遊亭圓朝による書き換え「真景累ヶ淵」などが比較的、よく知られている作品であろう。詳しく調査をしたわけではないが、私感としては、「怪談噺」や「芝居噺」といった、「語りの形式」を要求する演目に、なんらかの本説を据え置いた作品が多いようである。これを別の角度から見れば、落語は、かしこまった「語りの形式」——様式、約束事——といった制度そのものをパロディによって相対化しようとしているのであろう。

落語「お菊の皿」はこうした落語的な書き換えのもっとも成功したケースであり、今日の口演頻度も高い。

今回の脚色に当たっては「番町皿屋敷のお菊が人気者になり、だんだんと俗化する」という落語版の根本設定をそのまま踏襲。そのうえで全面的な改訂をおこなった。

① 落語では演者の「地の語り」によってストーリーが進行するが、

ラジオドラマ版ではこれを廃し、映画研究会に所属する高校生、タカシの一人称的視点によって物語を進めた。従って、このドラマでは冒頭から結末までの全てのシーンを「タカシが目撃している」ことになる。年下の少年から見た物語という視点は原話に無いものである。

② 落語では特定の時代背景との結びつきが周到にぼかされている。

従って、噺は江戸時代とも現代ともとれるような融通無碍な背景の中で展開する。この融通無碍さは落語の長所であるが、今回は「テレビ中継」や「ネットへの動画投稿」といった設定を強調し、現代の物語であることを強調した。幽霊騒ぎによる現代社会批判というポイントをはっきりさせる意図である。

③ 落語では「皿を十八枚数える」理由が「風邪をひいているので翌日休むため、二日分數えた」というものであり、これがそのままオチになっている。今回の脚色では「皿を十八枚数える」というよく出来た趣向はそのまま残し、その理由を新しく創作した。

④ 物語の結末を新しく付け加えた。江戸時代から幽霊を演じ続けてきたお菊の霊魂は慰撫され、悔恨の情から解き放たれる。オチの翌日も幽霊が続けるであろう落語版との、ここが最大の相違である。落語において、登場人物たちは永久に繰り返される時間を生きている。長屋の八五郎や与太郎や隠居たちの生は、過去・現在・未来という時間の流れとは無関係である。それはアニメーション・キャラクターの「トムとジェリー」が永久に追いかけてくを続けていることによく似ている。そしてその時間概念は、徹底して現在のであるが故に、本来の意味でのドラマとは無縁である。私はドラマを過去の的なもの——遡及できない、特定の時間の中に生きる人間が、すでに決定されている運命と葛藤するさまを描いたものだ」と規程している。私は今回、滑

稽噺である「お菊の皿」を落語の時間概念から引き離し、「ドラマ」の時間に置き換えることを意図した。そのうえで一番の重要事になるのは、「永久のくり返し」である落語の時間を破り、お菊をその外部へ出すことにあった。そのためには、何らかの「結末」が必要になる。

私は彼女の霊魂を救済することでそれを実現しようとした（いや、正直に言えば、彼女を救済したいという意志が先にあり、あとから具體的なアレンジを構想した）。そのため、落語ではひとこと触れられるだけである恋人（落語では三平という人物名を三之助に変更）への執着をはっきりさせた。「幽霊を引退し、平穩に暮らす」という結末は聴き手にあるカタルシス（浄化）を与えられたであろうか。

⑤ 落語では「お菊が皿を九枚まで数える声を聞くと死ぬ」と設定されているが、今回のラジオドラマのプロットにはかえって不要であるので、今回はこれを廃した。

おもな改訂は以上である。

映画研究会に属する高校生三人が活躍するという設定は『桐島、部活やめるってよ』『SUPER8』という二本の映画にインスパイアされたものだ。

学校の校舎が修道会の建物を改築したものだという設定は、いわば楽屋オチである。四谷にあった文化放送旧局舎が、聖パウロ修道会の建物を改築したものであったことを当て込んだものである。ただしこのことは一般リスナーにもよく知られていた。この洒落が通じないにせよ、無味乾燥な校舎を舞台にするよりは、ある程度、洒落た雰囲気を出せたのではないかと思う。

はじめに記したように、落語の「お菊の皿」そのものが「番町皿屋敷」の巷説をパロディ化したものである。従って、今回のラジオドラマ

版は書き換えの書き換え、ということになるが、私は「古典」という概念を、このようにして本説を変奏し、語り継いでいく連鎖運動の中にこそ宿るものだと考えている。鑑賞者は、書き換えられた作品と、本説の双方を視野に入れることが理想的である。このあたりの自説は拙著『落語の聴き方楽しみ方』（ちくまプリマー新書）に記した。

ラジオドラマ「紙入れ」

一月二八日放送

(登場人物)

- ・新吉 (貸本屋) (20歳)
- ・おさき (人妻・昼と夜で違う顔) (28歳)
- ・甚兵衛 (おさきの亭主・棟梁) (42歳)
- ・お仲 (甚兵衛宅の女中) (15歳)
- ・天使 (男の子) (17歳)
- ・悪魔 (女の子) (17歳)
- ・猫のタマ (※鳴き声のみ。だれか女性が兼ねて下さい)

※ 天使の声、悪魔の声にはすべて薄いリバープがかかってもよいと思う。

※ 猫の鳴き声は、それぞれ、ニュアンスを加味してください。

※ 時代背景は大正時代くらい。

○シーン1・新吉の独白

SE チャリン (お金の音)

新吉 ……たとえば、の話です。

たとえば、道を歩いていて、目の前にお金が落ちていたら。そりゃ、拾って、届け出るのが人の道です。

けど、まわりに誰もいない……誰も見ていない。

そのとき、ちょうど小銭で買いたいものがある。

あなたなら、どうしますか？

そんなとき、私の心には決まって二つの声が響きます。

天使

「子供の時になりましたよね！ 落ちているお金は、交番なり大人の人にちゃんと届けましょうって。

額の多い少ないじゃないんですよ。

さあ、面倒くさがらずに、届けにいきましょう。

あなたはそれが出来る人です！」

これが、天使のささやき。

そして……

「なに言うてんの！ もらったいたらええやん！

誰もみてへんて。

いや、あのな、抵抗があるんやったらこう考えて。あんた

な、先週、ドブ掃除したやろ。そのご褒美。神様がくれはっ

てん。それでええやん。ほら、はよしいや」

新吉

これが、悪魔のささやき。

なぜか、ぼくのイメージのなかでは、天使が男の子の姿、

悪魔が女の子の姿をしています。

西洋の絵画でも、天使はたいてい、男の子の姿をしている

そうですね。私が商売にしている貸本で、そんなことを読ん

だことがあります。

○シーン2・甚兵衛宅 夜更け

天使の導きと悪魔の誘惑……どちらの声に耳を傾けるべきなのか。これからはじまるのは、そんなお話です。

SE 火の用心 チョンチョン……

SE 猫のタマの鳴き声

新吉

「……おさきさん、こういうことをいつまでも続けているのは、やっぱりマズいと思うんです。」

今日は、それを言いたくてこちらに」

おさき

「なんだい、さっきからずいぶん血相を変えていると思ったら、そんなことかい。（笑う）かわいいもんだねえ。」

……大丈夫だよ。うちのひとは、今日は泊まりで帰ってこないんだからさ。安心しておいでよ」

新吉

「いえ、今日はすぐ帰るつもりです。こうしていても、いつも世話になっている甚兵衛親方を裏切っているような気がして。胸のあたりにもやもやしたものが……」

おさき

「馬鹿だねえ。あたしとお前が出来ているのを知ってるのは、あたしとおまえの二人きり。女中のお仲にはちゃんと小遣いを渡してあるから、そこから漏れる心配はありやしないよ」

SE 猫のタマの鳴き声

おさき

「……あ、そうそう、このタマも一部始終を知ってたっけね。だけど猫が物言うわけじゃなし。あたしたちが口を割らなきゃだれも知る気遣いはありやしないよ」

新吉

「だけど、身より頼りのない私に、貸本屋の仕事を世話してくれたのは甚兵衛親方。いわばわたしの恩人です。」

その恩人のおかみさんと、あの、こうした関係に……」

おさき

「わたしとあの人は一廻り以上もトシが違うんだよ。」

そりゃ、仕事熱心で丈夫なところは亭主には向いているけどね。人間ってのは、マジメを食べ物にして生きているわけじゃないだろう？」

新吉

「はぁ……わかったような……わからないような」

おさき

「そうそう、食べ物といやあ、おまえさんに精をつけてもらおうと思ってね。今日は鰻を誂えたんだ。」

（手を叩いて）

お仲、お仲。支度はどんな案配だい」

SE ふすまが開く膳部をもつてくる

「失礼いたします。おかみさん、御膳のお支度ができました」

おさき

「ああ、ちょうどよかったね。」

あとは、あたしがするから。お前はもう下がっていいよ」

「なにかありましたらお呼びください」

おさき

SE ふすまを締める。

「田舎から出てきた子なんだけどね。少しも色気づかないし、口が硬いからうちにはちょうどいいよ。」

……さあ新さん。鰻でもたべて一杯やろうじゃないかね。お酌してあげるよ、さあ」

新吉

「……では、一口だけ……」

SE 酌をする。徳利と杯の音がする。

おさき

「おや、おまえさん震えているんだね。怖くなったのかい」

新吉

「（飲んで）そりゃ、そうです。いいですか、不義密通は天下の御法度。もしこれがばれたら、私もおさきさんも、大変なことになるんですよ」

おさき

「だから！ ばれやしないと言ってるじゃないか。大きな体をして気の小さい男だね。あ、わかった。おまえ他にいいコが出来たんだろう」

新吉

「と、とんでもない」

おさき

「ああ、わかったよ。お前は二十歳の男ざかり。

あたしはもうトウのたった二十六。お前がこんな年増に飽きて逃げだそうってのも、無理はない道理さ。

だがね、終わらすんなら終わらずで、きれいにしようじゃないか。相手がどのだれか、包み隠さず言っておくれよ。

相手がいいコなら、私もお前のことを熨斗つけて送り出してあげるよ」

新吉

「違います。そんなじゃないんです」

おさき

「……あゝそうかい。そうやって、どこまでもシラを切ろうってんなら、あたしにも考えがあるよ。

おまえとあたしの関係を、旦那に全部しゃべっちゃおう……。こういうと面白いねえ……。あたしはイヤだイヤだって抵抗したんだけど、あの新吉に無理やり押し倒されて、それから……」

新吉

「何を言ってるんですか！ 作り話はよしてください！」

おさき

「（笑う）冗談だよ。青くなっちゃって。そんなうぶなところがお前のかわいいところなのさ。

あたしも一杯貰おう」

SE おさき、手酌で飲む

おさき

「（ちょっと酔ったふり）あー。ここんところ何かと忙しくってねえ。背中がこってしょうがないんだ。

新吉さん、悪いけど、ちょっとさすってくれないかい」

新吉

「は、はい。こちらあたりでしようか」

おさき

「そうだね。もうちょっと下のほう、そうそう、そこ。ただどそれじゃ力が弱いね。もっとしっかり押しておくれ

よ。

（手を叩いて）

お仲、お仲。まだ起きてるかい」

SE ふすまが開く

お仲

「失礼いたします。奥の間に布団を用意致しました」

おさき

「まあゝ気が利くねえ。やっぱり横にならないとなかなか楽にはならないからね。さあ新さん、こっちへ。

お仲、お前はもう下がっていいよ」

お仲

「はい。何かありましたら、いつでもお呼び下さい」

SE ふすまが開く（寝間へ移動したの意）

○シーン3・甚兵衛宅 寝間

おさき

「はあゝ、痛い、痛いけど……。いい。よく効くね。

新さん、お前はもみ療治がなかなか上手だね。

そこ、そのもう少し下だよ」

新吉

「ここ、でしようか。あまり凝っている感じもしませんが。

はい、骨のあたりですか……」

おさき

「そこじゃないよ」（など二人やりとり）

悪魔

「なにをしたらんねんお前は。おさきさん、さっきから誘ってはるやないか。ぐずぐずぐずぐず、いつまで肩もんだら気が済むんや。

おさきさんもう布団の上やで！ はよせえ。はよ！」

天使

「新吉サン、いけません。

わたしたち人間と動物を隔てるものは理性です。自分で自分をコントロールするからです。

目の前の誘惑に、理性が負けることがあってはナリマセン。
新吉さん、目を覚ましましょう。さあ深呼吸をしまし
う」

悪魔

「なにがコントロールやねん。人間はラジコンちゃうぞ。
人生、いまが楽しかったらそれでええやん。なあ！」

天使

「横からごちゃごちゃいうのはヤメてください。
さあ、新吉さん、理性の世界にＵターンしましょう」

天使・悪魔

（戻るのです）「行け！」「ダメ」「今や！」と言い合う）
「新さん、あたしゃなんだか暑くなってきた……」

悪魔

「こうなったら荒技。新吉、わたしが背中押したるわ！」
SE どさつ。（新吉が倒れ込んだ）

新吉

おさき

新吉

「あいてて……あ、あの」
「新さん……」
「おさきさん！」
M（盛り上がった雰囲気音楽～UP）

○シーン４・おさきと新吉のなれそめ

新吉

えー……。

いくら音だけで表現をするラジオドラマと言えども、ここ
から先をリアルにお聞かせするのは、ちょっと。
いや、ほんと、マズイです。

この時間を利用して、わたしとおさきさんが、どうし
てこんな関係になったのか、正直にお話します。

身より頼りなく、油屋の下働きをしていた私に目をかけて
くれたのは大工の棟梁をしている甚兵衛親方でした。

甚兵衛

「お前に向いているのは、ただの力仕事じゃねえ。そうだ、
横山町の貸本屋が若い衆を欲しいと言っていたが、働いてみ
ねえか？」

新吉

もともと本が好きだった私は、喜んで貸本屋に勤めること
にしました。貸本屋は、背中に行李のなかに何十冊の本をい
れ、それを担いでお得意様のところを廻ります。

お客様は、気に入った本があったら、十日とか、半月とか、
その本を借りて読みます。まあ、本のデリバリー・レンタル
といったところです。

私はお世話になった甚兵衛親方の家に、三日とあけず、顔
を出しました。

甚兵衛

「論語、方丈記、二十四孝……。
いやー、おれはこういう固い本は少しも面白くねえし、だ
いいいち、頭にはいらねえんだ。もうちょっと、すぐ読めてす
かっとするようなのはねえか」

新吉

「それでは、歴史読物などはどうでしょう。いまあるのは、
八大伝、真田十勇士、曾我兄弟の仇討、あ、西遊記なんての
もあります」

甚兵衛

「おお、そんなのがちょうどいい。じゃあ、今日は曾我兄弟
を置いていってくれ。続き物だな。こりゃ楽しみだ。

おい、さき、お前もなにか借りたらどうだ？」

おさき

「本はぜひぶん読みませんが、わたしにわかるものがありま
すでしょうか」

新吉

「ご婦人に人気なのは……曾根崎心中とか、本町糸屋の娘、
お富与三郎なんてのもありますよ。どれも恋愛ものです」

おさき

「私は、そのようなだけたものは。それよりも、日々の暮らしの役に立つような本があれば、ぜひ」

新吉

「そうですね……それでは「山之内一豊の妻一代記」、「賢夫人政岡の生涯」。これは翻訳物ですが「ナイチンゲールの一生」。あとは料理本やお裁縫の本ですね」

おさき

「ナイチンゲール……というのは何でも異国の立派なおかただと聞いたことがあります。では、それをお願いします」

新吉

「まいど、ありがとうございます」
……それが、私がおさきさんに出会ったはじめでした。甚兵衛親方は仕事で留守のことも多く、留守をあずかるおさきさんに本を返してもらうこともよくありました。

おさき

「はい。『宮本武蔵旅日記』と『建礼門院とその生涯』。親方が、面白いから続きを置いてってくれと言っていましたよ」

新吉

「ありがとうございます。お代も確かに」

おさき

（だんだん態度変わって）
「ところで、ねえ新吉さん。うちの親方にしても、男の人ってのは、どうして書物を紐解くのが好きなんだろうねえ？ あたしや、本よりも、もっと別のところを紐解くほうが楽しいように思うんだけどね。」

新吉

「お前さんだってそう思うだろう？」

おさき

「べつのところ、ですか？」
「ナイチンゲールの本は確かに役に立ちました。あたしも一度きりの人生、決めたことをしようと思いついてね。ねえ、新吉さん、こ・こ・の帯紐に手を掛けてごらん。」

新吉

お前さんに教えてあげるよ。い・ろ・ん・なところの紐解きかたを」（エコー）
……というわけなんです。

不思議なのは、そのとき、誰かに背中を強く押されたような気がして……いや、これは言い訳です。

これが一年前のこと。

それから、おさきさんは、旦那が家を留守にするごとに、私のことを呼び出して……そういうわけで、はい……。

○シーン5・もとの甚兵衛宅 寝間（深夜・一時間後）

SE 猫のタマの鳴き声

おさき

「（息づかい）……新さん、水を一杯とっておくれ。（飲む）ああ、ありがとうございます」

新吉

「（息づかい）私にも半分。（飲む）ああ、うまい。いま、何時くらいかな」

おさき

「朝までにはだいたいぶんあるよ。少しゆっくりしたらいいさ。あの人帰ってくるのは明日の夕方だと言っていたから」

新吉

「少し冷えてきた。襦袢はどこへやっただろう」

おさき

「たしかこのへんに」

新吉

SE 表の扉をガタガタやる音
「おや、表でなにか音が」

おさき

SE 猫のタマの鳴き声
「ほらね」

甚兵衛 「酔って」 おーい、帰ってきたぞ。表を開けてくれ！」

新吉 「親方！ た、たいへんだ！」

おさき 「（平然と） おや、あの人、ずいぶん早く帰ってきたんだね。

新さん、なにをぐるぐる廻っているんだい。早く着物を着てしまいなよ」

SE ふすまが開く

お仲 「奥様、旦那様がお戻りです」

「聞こえているよ。旦那の迎えはあたしがするから、お前は勝手口を開けて裏から新さんを。わかったね」

お仲 「はい」

甚兵衛 「（外から） おーい、おさき。お仲！ 聞こえるだろう。」

早く表を開けねえか。寒くっしょうがねえ」

おさき 「（外へ） はいよ。いまご不浄に入っていますんですね。

すぐ開けますよ。ちょいと待っててね。

（小声で）

ちえ、いいところだったのに」

○シーン6・夜道

SE 夜道を走る新吉

新吉 まずいぞ、まずいぞ。こんなピンチははじめてだ。

見られたか？ いや、それはたぶん大丈夫だ。

おさきさんが時間を稼いでいる間に、勝手口からそっと逃げ出したからな。

着物も着て、帯もしめて、羽織も着て、草履も。

忘れ物はないだろうな、煙草入れに、手拭い、よし、ある。

それから、一番大事な、お金を入れた紙入れ……ん？
紙入れ……ない、ないないない。まずい、忘れた！

しかも。あの紙入れの中には、おさきさんから貰った手紙が入ってるんだ。しかも、しかも、あの紙入れは甚兵衛の親方から貰ったものじゃないか。

あーなんて馬鹿なんだ、おれは！

どうしたらいい、どうしたらいいんだ。

「新吉サン。これをよい機会だと考えるのです。

過ちをみとめ、もう二度と二人きりでおさきさんと会うのはやめましょう。そして、甚兵衛サンに謝るのです。

きっと許してもらえます」

「あほか。なんでわざわざ自分で墓穴を掘るようなことをせなあかんねん。大丈夫、大丈夫、甚兵衛、ずいぶん飲んどったがな。なんとでも言い訳できるって」

だが、もしあの紙入れに気がつかれたら、いずれにしてもこの町にはいられない。だとするならば、いっそ遠くに逃げようか。

「新吉サンの身に危害がおよぶ危険性があるのなら、逃げるのも選択肢の一つではあります。

その場合は、甚兵衛さんに心からあやまりの手紙を書き、この町をあとにするのデス。そして、新しい環境で正しい暮らしをしましょう」

「なんでやねん。せっかく貸本屋の商売もうまくいってるのに、自分から逃げ出すってありえへんやろ！

第一、まだ、ばれたかどうかはつきりせえへんので。逃げるにしても、ばれてからで間に合うって。

さっきの逃げ足けっこう早かったから、逃げ切れるわ。保証する、保証する」

天使 「あなたは無責任な発言が多すぎます」

悪魔 「なんやて」

天使・悪魔 「人生やり直しを」「大丈夫」「罪が」「ないわ」などと言いつ合う

新吉 「ああ〜！ おれはなんて大馬鹿者なんだ〜」（エコー）

M （不穏な音楽かぶる）

○シーン7・夢の場

SE 拍手・歓声（夢の中なので）

お仲 「皆さん、お待たせしました。これより不義密通を働いた人妻・おさき、ならびに貸本屋・新吉の処刑をおこないます。亭主・甚兵衛と町内の年寄り連中、法律学者が相談をしました結果、おさき、新吉の両名にはきついくすぐりの刑が処されることになりました。

執行人は、全てを見ていた、わたくし女中のお仲です。では、まいりま〜す！ ほれ、ほれ、ここか？ ここか？」

二人 「うわーっ。くすぐったい。はははははは」

お仲 「まだまだ、これしきのことではすみませぬぞ！」

SE 雀の鳴き声（朝）

新吉 「……わーっ。お仲さん、やめて……やめ……はあ、夢か。

ちょっとウトウトしてはこんな夢ばかり見る。

逃げてみきつと苦しいだけだ。

ええ、もう、しょうがない。

なるようになる覚悟を決めて、親方のもとを訪ねよう」

○シーン8・甚兵衛の家

SE 猫のタマの鳴き声

甚兵衛 「おい、さっきから家の前を出たり引っ込んだりしているのはいったいだれだ？ まさか泥棒じゃねえだろうな？」

「お、親方、おはようございます」

新吉 「なんだ！ 新吉じゃねえか。おれはお前に話があるんだ！ こっちへ入れ！」

新吉 「はいっ！ おじゃまします！」

甚兵衛 「新吉。おまえ、おれに何か言うことがあるんじゃないかねえのか。

（間）

とぼける気か……？ てめえ、男と男の約束ってものを一体どう考えているんだ！」

新吉 「すいません！ と、とんでもない間違いを！」

「間違いないじゃすまされねえぜ。てめえ、いつまで待ったら太閤記の続きを持ってくるんだよ？ 約束じゃなかったのか？ おれは気が短いんだ。早くしろよ」

新吉 「……は、はい……スイマセン、必ず持ってきます……」

甚兵衛 「ところで、おめえ、ここんところちょっと痩せやしねえ

か？ 顔色も真っ白だ。なに心配事でもあるんじゃないかねえのか」

新吉 「はい、あの、ひとつ心配事が」

甚兵衛 「おっと待った。おれも少しばかり長く生きているからな。

当ててやろう。しくじりといえは酒だが……おまえはあまり飲まないからな。これは違うな。

酒じゃないとすれば、バクチ……だがおまえはバクチも打たねえからな。

とすると……ふーん……あ、わかった。女か！」

新吉 「はい、実は……そうなんです」

甚兵衛 「ははは。ま、若けえうちの色々あらあ。あとになってみりゃ、みんな笑い話になる。年月が許してくれるってものだ」

新吉 「許して……いただけますか？」

甚兵衛 「うむ。少しマジメに言うぞ。廊通いと、親の目を盗んだ若い者の逢い引き。まあ、こんな事は許されるんだ。だがな！ 絶対に手を出しちゃいけねえのが人の女房だ!!」

新吉 「ひえっ」

甚兵衛 「いいか、教えといてやる。人の女房にだけは絶対に手を出しちゃいけねえ。

人の女房と枯れ木の枝は、登り詰めたら命がけってな。二人だけじゃねえ。まわりの者も大変なことになるんだ。ん？ ……おまえ震えているな。もしかして図星なのか」

新吉 「そうなんです」

甚兵衛 「そうか……。まあ、なっちまったものしょうがねえ。相手は一体、誰なんだ？」

新吉 「わたしが、大変お世話になっている、親方の……おかみさ

んなんです」

甚兵衛 「（気がついていない）お世話になっている、親方のかみさん……。おい、そりゃあまずいぞ。その親方は気がついたのか？」

新吉 「気がつきましたか？」

甚兵衛 「なんだ？」

新吉 「いえ。いまのところ、気がついていないようです」

甚兵衛 「（ほっとして）そうか、ならよかったじゃねえか。これから気をつければいいこった」

新吉 「じつは。そのおかみさんと二人でいるとき、夜中になって親方が急に帰ってきて、部屋に紙入れを置き忘れてきてしまったんです」

甚兵衛 「なに？ 帰ってこないはずの亭主が急に帰ってきた。間の悪い野郎だなあ。

けど、紙入れくらい見つかったも大丈夫じゃねえのか？」

新吉 「その紙入れの中には、おさ……いやおかみさんからの手紙が入っていました。それに、その紙入れは、その親方から頂いたものなんです」

甚兵衛 「この馬鹿野郎。すっかりしなくちゃいけねえぜ。いいか、そういう手紙は読んだらすぐに焼き捨てるんだよ。

で、その親方は紙入れに気がついたのか？」

新吉 「気がつきましたか？」

甚兵衛 「なに？ おめえ、さっきから所々へんなことを言うな」

新吉 「いやあの、寝不足で……」

SE ふすまが開く

おさき

「おや、新吉さん。ずいぶん早いお越しですね。また新しいご本でも入りましたか？ このあいだの二宮金次郎先生のご本、とても勉強になりましたよ」

甚兵衛

「いや、こいつ今日は仕事じゃねえんだ。なんでも人の女房に手を出してな、そこに間抜けな亭主が急なご帰還。

泡を食って女からの手紙が入った紙入れを忘れてきたんだとよ」

おさき

「まあ、新吉さんにもそんな浮ついた話があるんですね。

けど……心配するには及ばないと思いますよ。

だって、ご亭主の留守中に、若い子と楽しもうっておかみさんなんでしょう？ そこに抜かりはない……と思いますよ。

そのいい人が帰ったあと、部屋の中を見回して、床の間かどこかにおいてあった紙入れは、ちゃんと自分がしまっておいて、あとで彼にそっと返すんだと……思いますよ。

ねえ、お仲もそう思うだろ」

お仲

「はい。きっと。そうだとそう思います」

甚兵衛

「はは。こいつもませたことを言ってるあ。

まあ、たしかに、さきの言うとおり、その女が、うまいことやっけていてくれるだろうよ。

第一、自分の女房を若い男に寝取られるような間抜けな亭主野郎だ。

新吉

たとえ紙入れがあっても、そこまでは気がつくめえよ」

おさき

「……はは（笑いが凍る）……」

「こりゃ、いいオチが付きました。だから新吉さんはなんにも心配することはありませんよ。

猫のタマ

ねえ、おタマ、おまえだってそう思うだろう？」
「（色っぽく）ニヤーン」

おわり

「紙入れ」創作ノート

「紙入れ」は艶笑落語としてよく知られた一席である。

前半の女主導の密会場面、主人公が情事の翌日、旦那のもとを訪ね、ちぐはぐな会話を交わす後半部がともによく出来ている。

ラジオドラマ化にあたって、原話の骨子をそのまま使用した。

落語版の場割は

A・主人公と人妻が密会をしている場面

B・主人公が夜道を逃げる場面

C・翌日、主人公が旦那と対面する場面

と滑稽漸らしい簡潔な構成になっている。

今回の脚色では、この構成を下敷きにしながらも

A・主人公のモノローグ

B・主人公と人妻が密会をしている場面

C・主人公が旦那との関係や、人妻とのなれそめを語るモノローグ

D・主人公と人妻が密会をしている場面（Bの一時間後）

E・主人公が夜道を逃げる場面

F・主人公が見る夢の場面

G・翌日、主人公が旦那と対面する場面

と大幅に増補をした。

落語の密会場面は、「晩酌をしている」前半のくだりと「情事のさなかに旦那が帰ってくる」後半のくだりを演者の「地の語り」でブリッジするのが標準型になっている。「品川心中」や「幾代餅」といった遊郭を舞台にした噺でも、情事の時間そのものは、演者の語りによって省略

するのが落語の通例である。

私の脚色は、その形式を継承しながら、両シーンの間にCの場面を増補した。落語では、主人公と人妻のなれそめは語られないのだが、今回は、ここにシーンを挿入している。この場面に關しては、いくつかの展開を考えた、おさきが新吉に好意を寄せるきっかけや、二人が段々と親密になるプロセスを表現することも頭に浮かんだが、考慮の結果、あえて突然に女が男を誘うことにした。このラジオドラマは新吉の一人称的視点から語られているので、女の感情にうぶな新吉は気がついていなかった——と考えれば、女の感情吐露が新吉からは「突然」に見えてもおかしくないだろうというのが第一の理由。もうひとつの理由として、恋愛感情、とくに性的な衝動をはらむ心の動きは、いつだって、「突然」にわき起こるものではないだろうか、私は思うからである。

ちなみに、落語では新吉の職業を貸本屋とする場合と、呉服問屋の手代とする型がある。呉服問屋の手代とした場合、商売上、得意先の夫人には逆らえないという枷が効く。しかし、今回は貸し出される本のタイトルと登場人物の個性——おさきに関しては偽装された個性——をからめたかったので、貸本屋の設定を使用した。「書物を紐解くよりも別のところを紐解いた方が楽しい」というのは筆者の考案したギャグである。Fの夢の場も落語にはない。この場面によって新吉の不安な心理をユーモラスに表現することを意図した。もうひとつ、現実的な理由として女中お仲の活躍場面を、ひとつつくっておきたかったからである。全てを一人で演じる落語と違い、声優が一人役を演じるラジオドラマでは、こうした「現場的」な計算もときに必要であろう。

順序が逆になったが、全編の冒頭に、新吉のモノローグを付けた。

新吉の一人称的視点によってストーリーが進むことを明確にするため

と、「天使」と「悪魔」のキャラクターをまずここで出しておきたかったからである。この両名は無論落語には出てこない。「天使の声」と「悪魔の声」が響くことで、揺れ動く新吉の心をユーモラスに表現することを意図した。悪魔を上方言葉にしたのは、天使との対比をわかりやすくするためと、上方文化圏により顕著な「理想を廃した身も蓋もない社会把握」の価値観を導入したからである。

Eの場面で天使と悪魔が「逃げるか否か」を言い争うくだりは、原話の落語では、新吉のモノローグによる「逃げようか」「いや、ばれてないかもしれない」という内的煩悶によって表現される。落語には意外に、自分の言動、思ったことを独白する場面が多い。私がいづれにあげるのは「芝浜」で主人公が長屋から出かけ、財布を拾うまでの長いシーンである。この間、主人公は自分の内心や情景描写を延々と独白する。写実に考えれば、こんなに独り言の多い魚屋はいないはずだが、これは落語の語りの制度によって、聴衆には不自然さを与えない。落語の独白は、私は先行芸能である狂言の影響下に定着したものだと思う。独白は、ある事情によって外出をしなくてはならなくなった人物が、ぶつくさいいながら、ひとり道を歩んでいく〈道行き場面〉に多く、これは狂言・落語に共通している。

女中は落語版にも存在する。しかし、台詞すら与えられない演出がほとんどであり、どちらかというと、人妻の家の経済的背景、生活水準をわからせるための点景であるかと思う。今回の脚色では彼女にある種の人格を与え、おさきに、積極的に協力するキャラクターにしてみた。彼女はいづれ、おさきのような女になるかもしれない——あるいはおさきを反面教師にするかもしれない——いづれにしても、女の腹の中にはなにかがあり、それが旦那からは一向に見えてないという図式をラストに明示

した。

新たにもうけたキャラクターはもう一匹。猫のタマがそれである。タマは全てを知っているが、ひとことも口を割らない。人間たちのおこないをドライに相対化しかねない、不思議なニュアンスが出ていれば幸いである。

放送資料

■番組名 『青山二丁目劇場』

■企画 株式会社 青二プロダクション

■制作 株式会社 文化放送

■放送時間 毎週月曜日、二〇時三〇分～二二時。文化放送より放送。

■ラジオドラマ「たのきゅう」「井戸の茶碗」「お菊の皿」「紙入れ」

■原作 落語

■脚本 松本尚久

■演出 久保速人

■制作統括 矢代えり（文化放送）

■「たのきゅう」二〇一三年一月七日（月）放送

■出演 田能村の久兵衛 松野 太紀

うわばみ 矢田 耕司

長十郎 岸野 幸正

村の娘A 一木 千洋

村の娘B 松井 桃子

茶屋のばば 上村 典子

■「井戸の茶碗」 二〇一三年一月一四(月) 日放送

■出演 清兵衛 西脇 保

千代田朴斉 掛川 裕彦

おゆき 神田 朱未

高木作左衛門 小林 通孝

細川候 幸野 善之

■「お菊の皿」 二〇一三年一月二一日(月) 放送

■出演 お菊 佐藤 朱

タカシ 井野 優

トモコ 森宗 春佳

コウスケ 田中 大文

アナウンサー 長久 友紀

宮谷先生 龍谷 修武

■「紙入れ」 二〇一三年一月二八日(月) 放送

■出演 新吉 会 一太郎

おさき 川名 真知子

甚兵衛 今村 直樹

お仲 大空 直美

天使 粕谷 雄太

悪魔 寺西 智美

おわりに

紀要掲載にあたって、収録時に使用した台本のわずかな部分を改めた。細かな言い回しなど、実際に収録に立ち会って気になったところである。また、台本と実際の放送には多少の異同がある。言葉を出演者の言いやすい言い回しに改める場合もあり、放送尺の関係で、収録後、編集作業により部分的なオミットが行われるケースもある。

放送台本は、ながらく〈現場用〉に作成され、放送が終わればそのまま破棄されてしまうものであった。映画台本、舞台戯曲などに比べても、放送台本、ことにラジオ番組の台本は散逸がいちじるしい。

近年、社団法人日本放送作家協会が中心となり、放送台本のアーカイブス化への準備がようやくはじまったが、これはもっと早くに着手されてよいものだった。放送作家協会だけではなく、放送局、国会図書館などでも放送台本をひとつの文化財として保存・公開・共有化につとめるべきであろう(現在、国会図書館には脚本や台本そのものは収蔵されず、図書やシナリオ雑誌等に掲載された作品のみが収められている)。

映画台本や舞台戯曲と同様に、放送台本は文学作品の一分野であり、さまざまな角度から読まれ、論じられてしかるべきだと、私はひとりの放送作家として考える。

了

掲載作品の無断上演を禁ず。上演を希望する方は作者までご連絡下さい。

Kasumi6128@hotmail.com 松本尚久